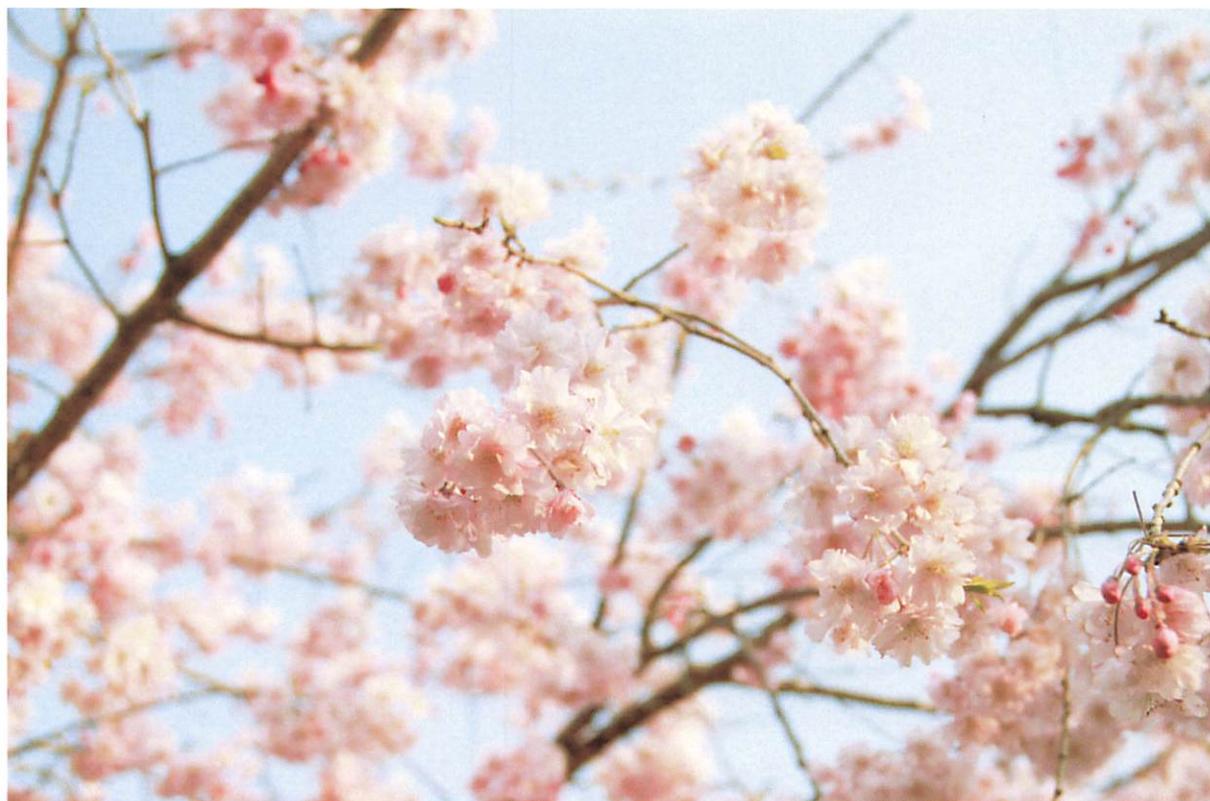


平成26年度
西濃学園教育報告書

豊かな学びの共同体を目指して
～「存在することの確かさ」を支える～



学校法人西濃学園

目 次

| | |
|--|----|
| はじめに | 1 |
| I. 厳しい自然の恵み | 2 |
| II. 西濃学園のコンテインメントの多層性 | 5 |
| III. 自己感の発達を支援する教育活動 | |
| 1. 自己感の発達とは | 7 |
| 2. 一日の生活リズムの安定と内在化 | 11 |
| 3. 一年間の体験を通して | 18 |
| IV. 平成24年度教育活動報告 | |
| 1. 人のためになりたい、という思いが育つ学校 | 25 |
| 2. 自立に向けて本当に必要なことを問う学校 | 31 |
| 3. 安全の源となる学校 | 39 |
| 4. やり直したいと思えたときにやり直せる学校 | 49 |
| V. 平成26年度教育活動報告 | |
| 1. 自己イメージを得つつ、 現実とかかわることができるようになっていったA君 | 61 |
| 2. 自らに「それでいいのか」と問うまなざしを 向けることができるようになったB君 | 69 |
| 3. 「友だち」とお互いに呼べる仲間をつくり、 人への不信感を収めていったC君 | 76 |
| VI. 西濃学園のあゆみ | 83 |
| おわりに | 84 |
| 引用・参考文献 | 85 |

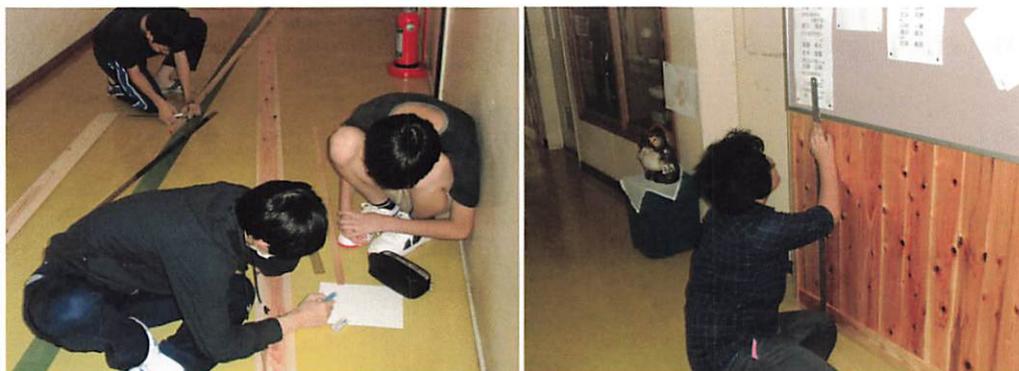
はじめに

学園長

開校して6年の月日が経とうとしております。さまざまな不安を抱え西濃学園に辿り着いた子ども達と出会い、そして生活を共にすることでいろいろな問題に直面してきました。私どもが経験してきた教師観だけではどうにもならず専任の臨床心理士のアドバイス、さらに外部からお招きしている専門家の指導のもとでの定期的な研修会において悩める子ども達の本質を学びながの支援活動しております。

本年度は、岐阜県不登校生徒対策支援モデル事業に指定されましたことは、私どもの教育の節目そして励みとなりました。事業の一つとして校舎の廊下を県下の間伐材を使用し生徒と共に腰板張りを計画しました。この事業においては、藤橋地区長の橋本勝範氏そして学園の幹事でもあられる高橋卓氏のご意見、そして揖斐川町の製材業者の方々のご協力を得て実行に移すことができました。また指導にあたっては、私が以前奉職していました高校の54歳なる大工の卒業生が生徒、職員に一つ一つ丁寧に教えてくれ予定いたしました三分の一が出来上がりました。主に携わった3年生は予想以上に真剣に取り組み、自分達の学校創りに思いを馳せていました。さらに本年度は博報財団から第45回博報賞を受賞することができました。今回は全国から83の学校、団体が推薦され16校が選ばれました。また2月には4校が教育フォーラムにて発表の機会が得られ西濃学園の教育を広く知っていただくことができました。

不登校生徒対策支援モデル事業の指定を機会に、開校以来の私どもの教育をまとめてみました。毎日試行錯誤の連続でしたが、振り返ることでさらなる一步を求めていきたいと職員一同肝に銘じております。報告書にお目通しいただきご指導が賜ればこの上ない喜びです。



I. 厳しい自然の恵み

西濃学園の特徴としてまず挙げられるのは、豊かな自然に恵まれていることである。しかし、それは、同時に、自然の厳しさも享受せねばならない、ということでもある。

不登校の生徒を対象とした新しい学校を創ろうと考えたとき、生徒が集まりやすいように、都市部での設立を勧める声もあったが、学園長は地域の絆と荒々しいほどの自然が残る土地そのものが持つ、教育力、再生力に基軸を置き、揖斐のこの地に設立を望んだ。

例えば、今年の冬は、12月としては異例の大雪となった。ここまでではなくとも、西濃学園の冬は、毎年、長く、また非常に寒い。この「寒さ」一つをとっても、ここで生活をする限り、かならず向き合わなければならない自然の厳しさなのだ。

現代は、暑くも寒くもない快適な温度や湿度で、いつも明るく、また、便利な生活が求められている。しかし、そのような環境の中で生活していると、確かに不快を感じることも少なくなるが、刺激そのものが少なくなってしまう、人の身体感覚、ひいては精神活動を鈍磨させる方向に働いてはいないだろうか。現代の私学の環境整備の方向とは逆行していると言われるかもしれないが、西濃学園で、子ども達は、夏は暑く、冬は寒く、昔ながらの暗闇に多少なりとも恐れを感じ、また何かと不便な生活をおくらなければならない。しかし、不快な感覚も含めて、子ども達は、自分の感覚をより刺激されることだろう。意識に上ることはないが、自分の感覚を働かせなくてはならなくなり、直観的、本能的なところが活性化され、ひいては子ども達の生きる力の、もっとも原始的なところを培ってくと感じると感じる。



もう一つ、この不快なこと、不便なことの多い生活のなかで、得やすいことがある。子ども達の健康度にもよるが、「世話をしてもらっている」「世話をしてもらって心地いいんだ」ということを日々意識しやすい、ということだ。

Winnicottは依存を ①絶対的依存absolute dependency、②相対的依存relative dependency、③自立へ向かう段階という3段階に分けて考えた。子どもは、自分自身が人に依存しているという意識すらない状態から、人への依存を意識する状態を経て、自立していくという考え方である。

もちろん、Winnicottの乳児期の発達とは次元が異なるものの、思春期の精神的な自立へと向かうためにも、子ども達はもう一度この発達の過程を経なければならない。

西濃学園に来る前の子ども達は、家族の元で、主に母親からの、物理的にも精神的にも献身的な世話を受けてきたが、母子の一体感が強すぎたり、母子の間に介入する「他者」（父親がその役割を果たすことが多い）がいないと、本人達はそうしたことに気づきにくかったり、気づいていない状態になってしまう。それが、絶対的依存の段階である。母親とは一体であるため、自分が世話を受けているということに気づいておらず、その世話をされている状況や関係性を当然のように感じており、母親や家族に感謝の気持ちを抱くこともなく、母親をまるで自分の手足のように道具的に一方的に使ったり、母親が自分の意に添わないことを言ったり、したりすることを許さないことも多い。それが高じて、家庭内暴力を引き起こしている場合もある。

しかし、家族のもとを離れて生活をしなければならなくなり、いやがおうなく自分の世界に、あるいは母親と一体の世界に「他者」が入ってくる。そこで、母親や家族の存在を改めて意識し、自分が誰かに世話をしてもらっていたこと、自分が誰かを頼らなければいけないということに気づき始めるのである。絶対的依存の段階から、相対的依存の段階へと移行するのだ。すると、同時に、相手に対する感謝の気持ちや思いやりが生じ始める。

すでに記したように、西濃学園の冬は非常に厳しいが、安全や節約の観点からも、暖房器具を使用できるスペースや時間が制限されている。エアコンやストーブを好きなところで好きなだけ使用する、というわけにはいかないのである。しかし、だからといって、子ども達に寒い思いをさせるわけにもいかないのが、教師は、こまごまと配慮をしたり、世話をすることになる。夜は子ども達に湯たんぽを入れたり、石油ストーブの見回りをしたり、また朝は一番早くに起き、食堂や子ども達が過ごす部屋を暖めておく。子ども達は、そんな教師の姿を見たり、実際に世話をしてもらい、自分達が寒い思いをせずにご過ごすことができるのは、自分達のことを思って、自分達のために動いてくれている「他者」がいるからだ、ということを実感として学ぶのだ。子ども達は、おしなべて、実感のこもった感謝の言葉を述べて卒業していく。

相対的依存の段階へ移行することが、子ども達の自立や成長にとって不可欠であること、そして、厳しい自然の環境とそこで共に生活する人の世話やぬくもりが、この移行を促してくれていることがわかる。

また、自然は、厳しいときは誰に対しても平等に厳しく、悪意がないので、子ども達は、自分だけ不利益を被っていると被害的、迫害的になることがない。みんな一緒なんだから、みんなでこの環境を受け入れてやっていくしかない、と現実を受け止めて、我慢をすることも覚え、馴染んでゆきやすい。この点も、自然の恵みの偉大なところであろう。

便利で不自由のない生活環境も一つの理想的な生活かもしれないが、不便で不自由な体験からこそ学ぶことができることがいかに多くあるか、ということをよく知り、発達の援助に活かしていくことも、現代においては求められることなのかもしれない。



II. 西濃学園のコンテインメントの多層性

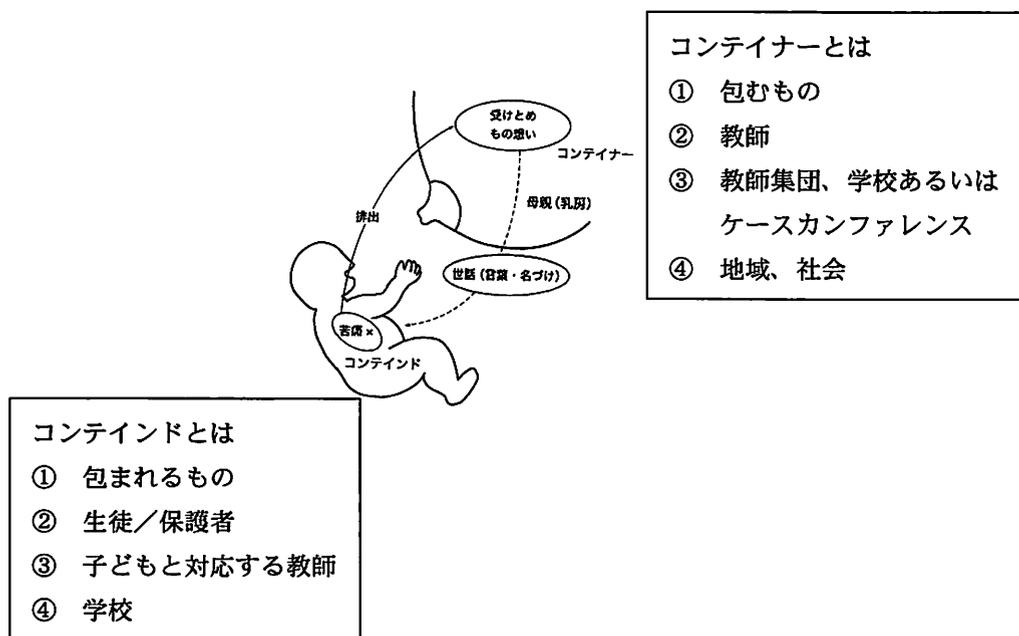


図1 コンテナ/コンテインドモデル (松木邦裕、1996、改変)

上記は、松木邦裕先生が紹介された、Bionの母親と乳児の交流のモデルだが、これを学校の在り方の多層的なイメージとしている。コンテナというのは、直訳では「受け皿」「容器」という意味で、コンテインドとは、「収容物 (なかみ)」「内容」という意味だ。よりイメージしやすいように、「包むもの」「包まれるもの」と訳されることも多い。

赤ちゃんは、例えば、おなかがすいた、という苦痛や不快なものを泣いたり手足をばたばたさせたりしながら排出する。すると、それをお母さんは受けとめて、「おなかがすいたのね」という言葉がけをしたり抱っこをして乳房を吸わせて授乳をするといった世話を返す。このような営みの中で、子どもは、これはおなかがすいたということなんだと、知ったり、言葉を学んだり、こんなときはどうすればいいかということを試行錯誤したりと、この相互的な交流が、情緒や思考の芽生えになる、というモデルである。

まず、②のように、コンテインドを、「子ども、生徒」、コンテナを「教師」と捉えて考える。教師は、こどもが問題や症状によって何を表現しようとしているのかを傍らにいて受け入れながら考え、試行錯誤しながら痛みや悲しみを理解しようとし、理解できたことを子どもに伝えていく、という連続的な世話をする。それを繰り返し、最後には子ど

も自らが自分のこと、周囲の現実をよく知り、自分で考えられるようになることを援助していく。コンテインドは「子ども」だけではなく、「保護者」や「子どもの家庭」も同様に対象となる。

しかし、子どもやその家族の排出する痛みが大き過ぎたり、わかりにくい形や、攻撃といった手に余りやすい形で排出されたり、あるいは教師側に問題があったりすると、このコンテナの機能が不全になってしまう。コンテインメント機能を失うと、互いに支配—被支配の関係となりやすく、また小さな問題も肥大化しやすくなり、責任のなすりつけ合いや、誰かが悪く、誰かがよい、という勧善懲悪の世界に陥りやすくなってしまふ。例えば、近年、モンスターペアレントといった形で噴出される問題などにもかかわってくることである。

そうならぬよう、③のように子どもと対応する教師を、コンテナとしての教師集団や学校がきちんと抱える、という機能が西濃学園では非常に大切になってくる。もちろん、このことは西濃学園に限ったことではなく、学校や教育機関、また対人援助支援にかかわるところであれば、大切なところだろう。西濃学園では、子どもと対応する一人の教師がコンテナとして機能できるためには、まず「教師集団」がコンテナとして機能できることが不可欠で、その結果ケースカンファレンスを充実させることができた。

ケースカンファレンスには、開校以来、愛知県安城市で小泉心理相談室を開業している、小泉規実先生にスーパーヴァイザーとして来ていただいている。スーパーヴァイザーのコンテインメントに支えられ、ケースカンファレンスでは、現在の学校の問題や困難を管理を強めて表面的な秩序を回復するのではなく、本当に子どもの育ちを支える力を強めていくという方向で解決していくために、子ども理解を深めることを軸に、教師同士の支え合う関係を強めていくことができる。そこでは、人間に対する優しい関心と深い理解という姿勢を出発点としているので、子どもについて知的に学び理解を深めるだけでなく、子どもに対する怒りや憎しみや悲しみなど「負」と言われる感情を含めて、自らの感情世界をありのままに表現することができ、それを教師同士が相互援助的に吟味し合い、支援や教師自身の成長に役立たせている。

さらに、④のように、コンテインドである「学校」を、コンテナとしての「地域」や「社会」が見守り育ててくれている。ある意味、よそ者として揖斐（揖斐川町藤橋地区）の地に来た私達だが、このような学校と地域との関係性でありたいと願い、またこうあるような関係性づくりも目指しており、それがさまざまな行事への取り組みともつながってきた。さらに、高齢化や過疎化が進んでいる地域なので、学校が地域のコンテナとなること、相互的にコンテインメントすること、も視野に入れていかななくてはならない。

この図が、西濃学園のコンテインメントの多層的なイメージのモデルになっている。

Ⅲ. 自己感の発達を支援する教育活動

1. 自己感の発達とは

不登校の子ども達に共通して見えてきた特徴は、自己イメージの希薄さ、脆さである(花田2013、大久保2013など)。自己イメージとは、自分で自分をどうとらえているかということで、後藤(2012)によると、「自己の基盤となるような様々な要素、まとまりと、自身を取り巻く世界との距離や関係性、そのすべてを抱合した概念」で「個人特有の世界の捉え方や感じ方も含めた、個人の体験そのもの、すべてが自己イメージに集約される」。Sternの「自己感」と捉えることもできよう。Sternは、自己のまとまりを促す主観的体験が、言葉を持つ以前に存在する自己なのだと主張し、その主観的な自己のまとまり方を「自己感」と呼んだ。この自己感は以下のように発達するという。

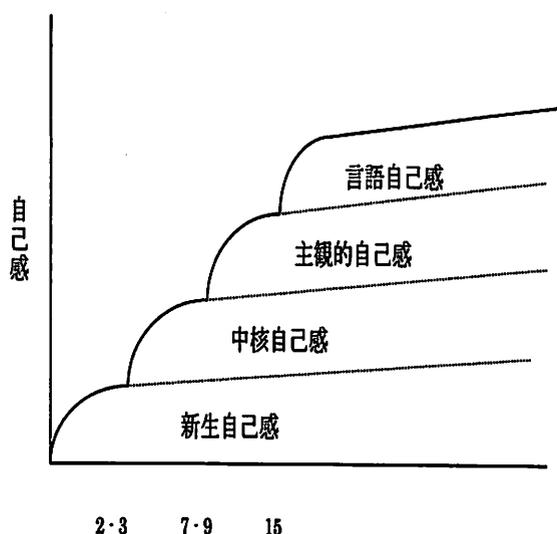


図2 自己感の発達順序

① 新生自己感

乳児は、出生直後から外界の刺激を多く取り入れるが、それらの刺激は統合されておらず、形、強さ、時間的パターンというように、体験の総括的な特性が記憶に書きこまれてゆき、それらの刺激が統合されていく。

② 中核自己感

単一で一貫した、まとまりのある、統合された身体的な自己感を持つようになる。身体的な水準で、自分は他者と別個の存在であることを学ぶと同時に、自分が他者とともにあることも学ぶことができる。

③ 主観的自己感

身体的親密性だけでなく、心的親密性が可能となり、間主観的にかかわり合いが可能となる。行動の背後にあってその行動を起こす精神状態、例えば、感情、動機、意図などがわかり、他者にも心があること知る。そして、他者との間で内的主観的体験が共有可能であることを学ぶ。

④ 言語的自己感

言語の獲得により、他者と意味を共有、伝達できるようになり、「他者と共にあること」の新しい方法を獲得する。

このように自己感は獲得されていくのだが、西濃学園に入学してきたときに、子ども達が描いた人物画を見てほしい。「自分をイメージしながら、一人の人を描いてください。頭から足まで、全身を描いてください」と教示をして、描いてもらった。生徒達の自己感の一端を表していると考えられる。

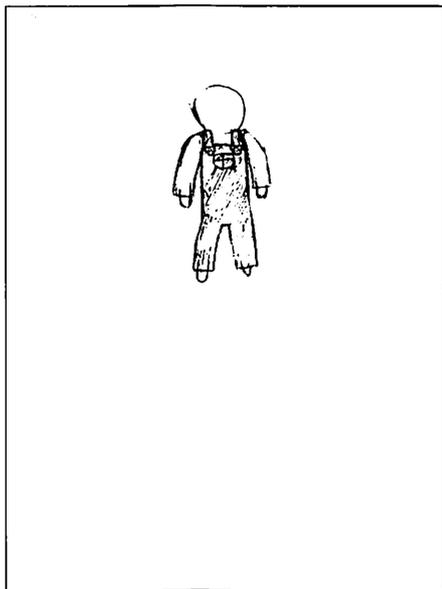


図3 A君の入学時の人物画

まず、A君の人物画（図3）であるが、画用紙上方に小さめに人型が描かれている。地面との距離は遠い。顔もなく、手もただ丸く描かれているのみである。ぬいぐるみ、あるいは幼児のような体型、格好である。地面からの距離の遠さは、根ざすところを持たない自己の浮遊感や、現実感の持てなさを表している。また、顔を描けないということは、自分で自分が誰かを特定することができず、丸く描かれた指のない手からは、自己を取り巻く世界に手を出すことができない無力感が表現されている。

次に、B君の人物画（図4）は、画用紙真ん中に小さく、太った男の子が描かれている。地面との距離が遠い。また描線の複数化が見られる。特に腹の筆圧が強い。地面からの距離の遠さは、自己の浮遊感、社会から漂っている自分を表している。描線が細かく重ねられていることから、自我境界が複数化し、不安であることが分かる。特にこだわって描かれているのは腹で、後から肉をつけ足すかのように描線が加えられており、太っていることに対する何かしらのこだわりが感じられる。手はあいまいに描かれ形をなしておらず、自己を取り巻く世界に手を出すことができない無力感が表現されている。無表情に立ちつくす絵から、家族関係に深くかかわることができないという無力感を感じる。

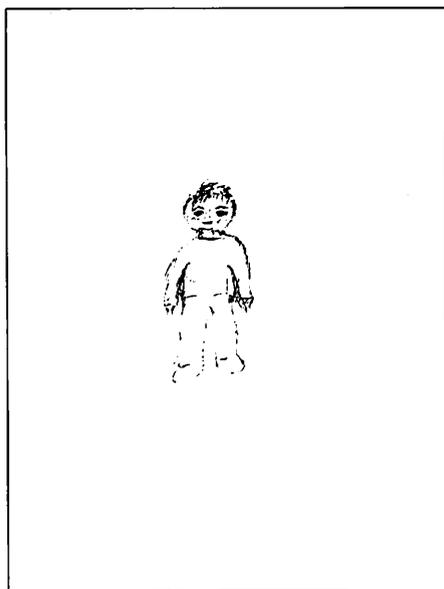


図4 B君の入学時の人物画

C君の人物画（図5）は、画用紙中央やや上よりに、非常に薄く棒人間が描かれている。地面との接点を感じられず、宙に浮かんでいるような印象を受ける。人間のイメージの乏しさと、存在感の希薄さがうかがえる。眼鏡以外は、無個性で、自己を表現することに何かしらの無力感とあきらめを持っているのかもしれない。身体イメージは貧弱であり、生きている実感、生活の当事者としての自己の感覚の希薄さが読み取れる。

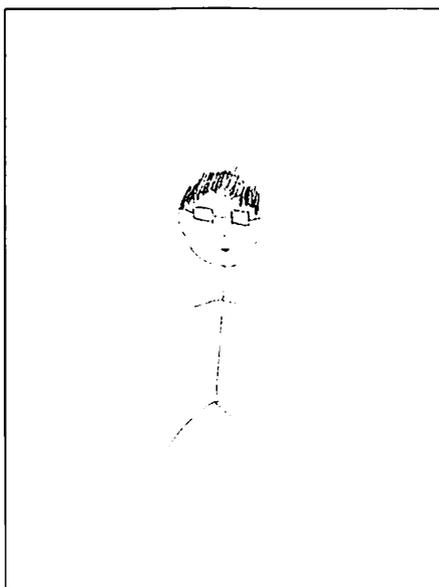


図5 C君の入学時の人物画

図5の棒人間の人物画が端的に伝えているが、西濃学園に入学してくる子ども達は、おしなべて身体イメージが貧弱で、生きている実感が薄かったり、自己の感覚の希薄さがうかがえる。また地面との距離が遠く、自己の浮遊感、社会から漂っている感じを受ける。手の描かれていない人物画も多く、社会や世界に手を出すことのできない無力感やあきらめを感じることも特徴である。

そんな子ども達の自己感をいかに支えていくことができるか、育てていくことができるか、を一つの柱として、西濃学園は様々な教育活動を構成している。人物画で取り上げた彼ら3人の歩みは、V. 平成26年度教育活動報告において詳しく触れていく。

2. 一日の生活リズムの安定と内在化

まず、もっとも大切にしているのが、一日の生活リズムの安定とその内在化である。表1が西濃学園のスケジュール表だ。

| 一日の生活の流れ | |
|---|--------------------|
|  | 7:30~8:00 起床・朝食 |
| | 8:15~8:45 朝の学習時間 |
| | 8:50~12:10 午前授業 |
| | 12:10~12:50 昼食・清掃 |
| | 13:10~15:30 午後授業 |
| | 16:00~ 部活動 |
| | 18:30~ 夕食 |
|  | 19:30~19:45 ミーティング |
| | 19:50~20:50 お風呂 |
| | 21:00~ ミーティング |
| | 21:10~ 寮へ移動 |
| | 23:00 消灯 |

表1 西濃学園の一日の過ごし方

西濃学園は、基本的に全寮制であるため、学校の教育だけではなく、生活の全てを教育的に活かすことができる。その実践の中で、生活のリズムの安定とその自律がいかに大切な要素であるかを実感してきた。例えば、社会人として就労をする際も、この生活のリズムの安定は必要不可欠となってくる。就労の継続に課題を持つ人達の多くが、毎朝起きることが難しい、といった生活のリズムの問題を抱えているという。生活リズムの安定という課題は、長い人生において、その人が自立して豊かに生きていくためにも基本的で大切な課題なのだ。この生活のリズムの安定をどれだけ内在化できるか、自律的に実行できるようになるか、というのは子ども達の成長のバロメーターでもあり、目標でもある。



食 事

毎朝決まった時間に起き、朝食を済ませ、充実した時間を過ごした後に昼食、午後もしっかり学んで夕食をくつろいでいただく。近くの道の駅の温泉で入浴をしてさっぱりとし、しっかりと就寝をする。携帯やゲームは使用してもいい時間が決められており、就寝10分前には職員が回収をする。このように書くと当たり前で、普通のことなのだが、こうして生活のリズムができてくると、身体のリズムが生まれ、自己感のもとになる身体性の感覚がしっかりとってきて、さらに、情緒や認知といった精神的な働きも動きやすくなってゆく。





授 業



休み時間



総合授業

共同生活なので、みんなで、同じリズムで動くことによって、このリズムに乗りやすくなるという相乗効果も大きい。もちろん、逆に悪循環への怖さもはらんでいることは忘れてはならないが、子ども達の成長において、共同生活の持つ力というのは非常に大きいと感じる。

自閉症スペクトラムの子ども達は、その過敏性ゆえに、新生自己感へと退行しやすいと言われている。この新生自己感への退行を防ぐためには、中核自己感という単一で一貫した、まとまりのある、統合された身体的な自己感をしっかりと持てるかどうかが鍵となってくる。Sternの理論によると、一定の生活パターンの中で、自分が一貫して生き続け、これからもそれは続いていくのだ、という実感を得ることで自己の中核が育てられる。そして、自己存在が現実から離れて漂っていくのを防いでくれるのだ。学園においては、なんといっても、規則正しい生活を自律的におくることができるようになることが、もっとも手堅く、中核自己感を育ててくれているように思う。

そして、共同生活では、互いに気持ちよく生活するために、嫌なことや面倒なことを引き受けなければならない、ということが、絶対に出てくる。例えば、現在は、衛生管理法によって状況が変わってしまったが、昨年まで食事の後の食器洗いは教師と生徒達が当番制で行っていた。子ども達にとっては、面倒で嫌な作業のはずだが、教師と一緒に、みんなの役に立つ役割を担うことができることを意外なほどやりがいとして楽しんでいた。子ども達にとって、というより、誰にとっても、人のために役に立つ自分として認められたい、必要とされたい、という気持ちは、素直な欲求である。

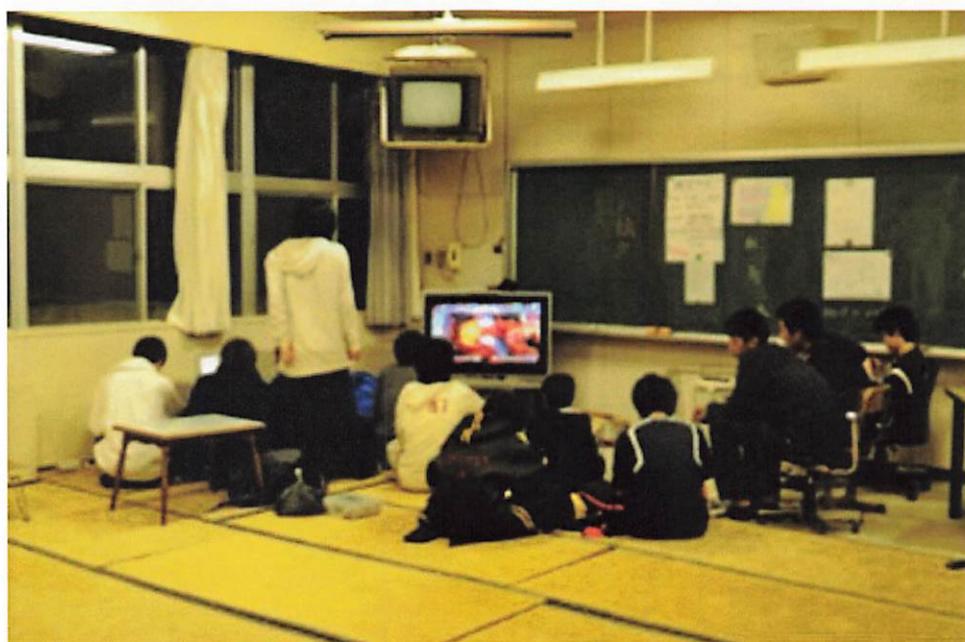


掃 除

また、みんなで遊ぶことができる「談話室」という部屋には、テレビが置いてあるが、台数は少なく、ゲームをしたり、見たいテレビを見るときには、譲り合いが必要となる。自分にとっての切実な問題として、公共性について考えたり、体験的に学ぶことができることは、非常に貴重な機会となる。



談話室



談話室

さらに、洗濯や自室の整理整頓、お金の管理なども教師と一緒に学んでいく。自分のことを自分でできるようになる、生活者として自信を持てるという手ごたえが、子ども達の自信の土台になっていく。しかし、自分のことを自分でできるようになるという「生活者としての自己」を強化していくためには、やはり、生活のモデルとなる大人の存在が必要となる。教師は、具体的な生活のスキルを教え、また子どもの日常生活を安定して見守る他者として、時には自己を適切に制御する他者として、重要な役割を果たしている。また、この守られた生活リズムは、母親イメージの基ともなり、自分を見守ってくれる他者の存在を心理的安全基地として、社会参加にあたっての勇気を得ることも促してくれる。

以上のように、まずは、地に足をつけて生きていく、という感覚を養うことが求められる。



毎日の全体ミーティング

3. 一年間の体験を通して

次に、西濃学園の一年間の過ごし方を見ていこう。西濃学園では、一年を通して、様々な行事に取り組んでいる。ここでも子ども達が、自分という感覚をしっかりと持てるように、自分という身体感覚を培うことができるよう、さらに、他者と共にあって、通じ合える、わかりあえる、そんな身体感覚とところの感覚を持てるような取り組みを積極的に行っている。

まず、地域活動では、地域のクリーン活動や、いびがわマラソンのボランティアなどを通して、実際に大いに役に立ち、地域からも感謝をもらう、という体験をしている。



清掃ボランティア（クリーン作戦）



地域清掃



マラソンで給水ボランティア

祭りも、地域活動の一つだが、祭りでないとは体験できない、祭り特有の、人々の熱気やにおいがある。一つの神輿を皆が担ぎ、掛け声を掛け合ったり、リズムや息を合わせて、自分の役割を果たすのだ。情動調律、とすべき営みが行われている。すると、自然と、同質性の高揚、興奮による同化の感覚、一体感が生まれる。ここには、言語を越えて人と触れ合うという実感がある。祭りは、一体感と自己の存在感を同時に強く感じることでできる共同体の営みだと思う。

主観的自己感は、中核的自己感の延長にあり、中核自己感のときに養われた身体感覚の持てる繋がりを土台に、情動の共有を経て、培われてゆく。夏山登山や祭りといった体験の共有は、情緒が他者とつながる、他者と内的体験を共有できる、という、重要なつながりの役割を果たし、主観的自己感を育んでくれている。



祭礼、御神輿担ぎ

西濃祭（文化祭）では、今年は集団的自衛権をテーマにした創作劇を子ども達自らの希望で作上げた。その後の振り返りも含めて、自分には関係のない他人事のように感じている様々な出来事を自分のこととして引きよせて考えたり取り組んでいくことの難しさ、しかしそのような主体性が必要なんだ、ということを考える機会になった。



西濃祭（創作劇）



西濃祭（地域学習）

エンカウンターでも、人と共にある自分ということを互いに肯定的に意識できるような体験に取り組んでいる。

西濃学園に入学する生徒は、おしなべて社会性が未熟である。社会性が不十分なため、学校で適応が上手くいかなくなり、不登校になってしまうという子ども達は多いのだろう。社会性の未発達にいたる背景、要因はそれぞれであるが、子ども達に身につけてほしい基本的な社会性はおおよそ共通している。

そこで、西濃学園では、社会性の一つの側面である社会的スキルを身につけるために、「U-SSTソーシャルスキルワーク」（株式会社日本標準発行）という体系的な教材を参考にし、SSTの時間を設けてきた。そのクラスに必要なスキル、その子に必要なスキルについて、個別に構成しながら使用をしていた。

しかし、子ども達には、挨拶や、お互いが気持ちいい言葉を掛け合うコミュニケーションの必要性や技術を教える以前の課題が大きく立ちはだかっていた。子ども達は、あまりにも、自己肯定感や有用感を持つことができず、コミュニケーションの力や社会性を自分に取り入れてみよう、とところを準備できるようになるまでになかなか至らなかった。

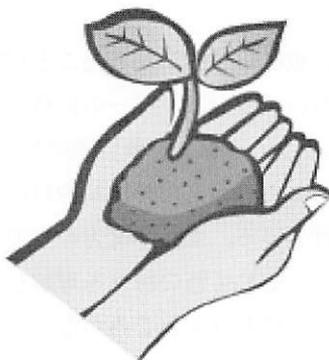
そこで、今年度はソーシャルスキルの学習から、構成的エンカウンターへと改め、より身体的、具体的、直接的に、自分が気持ちいいと感じられる感覚や他者と一緒において楽しく心地よいと感じられる体験を促していった。



エンカウンター

構成的なエンカウンターの中で、子ども達がもっとも楽しく意欲的に、また、驚きをもって取り組んだのも、他者と共に、自分の身体と心のつながりを実感する、という活動だった。活動内容は、二人でペアになり、互いの身体を持ちあげてみるのだが、「ただ持ち上げたとき」「楽しいことを考えていい気持ちになった相手を持ち上げたとき」「嫌なことや悲しいことを考えて苦しい気持ちになった相手を持ち上げたとき」の3パターンで相手の身体の重さをどう感じたか、を比較するのである。それを互いに行って、二人で、またグループで感想を伝え合うのだ。不思議なことに、持ち上げる相手がいい気持ちになったときは、その身体が軽く感じられ、反対に持ち上げる相手か嫌な気持ちになったときは身体が重く感じられるのだ。こんなふうに身体と心がつながっていることを、自分自身の実感や他者の実感を通して感じたり、話し合いながら共感し合える体験を子ども達はとても喜んだ。この体験は、自然と、自分にも相手にも大切な心がある、ということの学びにつながっていったのではないか。

社会性が大切、コミュニケーションが大切、という認識の前に、自分や他者がそれぞれ存在しているという「自己感」の確かさを、気持ちよく、心地よく、実感を伴って感じられる体験を支えることが不可欠だろう。



IV. 平成24年度教育活動報告

この年は、開校して4年を経て、これまで述べてきた西濃学園の教育の基盤が徐々に固まり始めた頃だった。今年度の報告の前に平成24年度に送り出した、12人の中学3年生との試行錯誤の報告も合わせてお読みいただくことで、西濃学園の教育活動の歩みをご覧いただけるかと思う。

1. 人のためになりたい、という思いが育つ学校

西濃学園では、まず、社会の役に立ち、社会の役に立てることを自らの喜びとする、そんな子ども達を育てたいと願っている。社会的な力を育てることを柱としているのだ。社会的な能力とは、人に迷惑をかけないといった消極的な社会性にとどまらず、共感性をベースにし、社会的スキルを身につけ、共同体に対する責任といった社会的意識を学ぶことである。すなわち、このような社会的な能力こそが、子ども達が社会に出たときに、本当に役立つものだ、子ども達一人一人を本当に幸福にしてくれるものだ、と考えるからである。

子どもの特性を最大限に活かし伸ばすために

K君は中学1年の5月に転入をしてきた。全く落ち着きがなく、何でもないことで不安になり苛立ち頻繁にパニックを起こしては暴れるのだった。

彼が不登校になったのは、小学校5年生のときだった。彼が生まれて間もなく両親は離婚し、彼は母親に引き取られて暮らしていたが、母親の再婚などの事情のため、父親に引き渡された。そのため、転校をしたが、そこで嫌がらせを受けたことがきっかけで、不登校となり、それから1年以上、西濃学園に入学するまで、家で引きこもっていた。しかし、その父の家では、父にも、父方の祖父母にも馴染めなかった。彼は、一度に全ての居場所を失っていた。

母親は、極度に教育熱心で、彼は「勉強しかしたことがなかった」とこれまでを振り返る。彼自身も、テストの成績がいいことは、唯一の自負であり、全てをもう一度やり直すために、中学受験を試みた。しかし、全滅。自暴自棄になった彼は、家で暴れるようになった。そして、いよいよ手に負えなくなったため、精神科に入院を余儀なくされる。そこでは、アスペルガーと診断を受けている。また、父方の家でも母方の家でも、彼を引き取ることを拒否したため、察があり、そして彼の特性を理解し対応できる学校を探して、そして西濃学園へ来たのだった。どこにも行くところがなく、最後の頼みを託して来たのだ。

自閉症スペクトラムの子ども達に共通するように、K君も自分の感情や欲求をコントロールしたり表現をすることが苦手で、人とかかわったり集団行動をすることができなかった。

だからこそ、いやおうなしに、集団で寮生活をしなければならなかった3年間は、社会で通用する人間として成長するためのかけがえのない機会となった。例えば、最初の頃は、学園長が新聞を読んでも、自分が読みたいと思うと、何も断ることなくぱっと取り上げて自分のものにしてしまう、というようなことが日常茶飯事だった。その度に、指導を行うわけだが、ここでも、自閉症スペクトラムの子ども達に対する適切な指導の方法が求められた。

困った場面での、発達障害の子ども達への関わり方は、現在の学校や教師であれば、みな悩んでいるところではないか。西濃学園では、経験を積むにしたがって、発達障害の子ども達への指導の仕方についての理解や対応の仕方の知恵や技術を積み上げてきた。自閉症スペクトラムの子ども達は、感覚過敏を持つため、小さな刺激に対しても自我が崩れやすいという特徴を持つ。よって、指導する際にもっとも心がけなくてはならないことは、「興奮して接近し過ぎたり、高くて大きな声で叱らない」ということである。叱る状況では、おそらく子どもの方もすでにある程度興奮状態となっていることが多い。そこに興奮した先生が高くて大きな声で叱ると、子どもはますます興奮し、暴れたり、パニックを起こしたり、逃げ出したりしかねない。あるいは、先生の声に萎縮して、何も話せなくなってしまう。たとえ、「はい」「わかりました」と先生の指導に従ったように見えても、彼にとっては、過度の刺激によって侵入されてしまう状況を回避したいための方便にすぎず、教師が叱ることによって伝えたい、分かってほしいと思っている内容は全く届いていないのだ。

K君に、社会的なルールや社会的スキルを伝えるときも、まず彼が興奮している状況であれば「大丈夫だから」「落ち着こうね」と、低くてゆっくりとした声で声かけをして、落ち着かせることから始めることが大切だった。そして、彼の気持ちを「〇〇なのかな」とくみ取りながら、かつ、こういう理由でこうするのが適切なのだという理論的な道筋の中で、そしてここも重要であるが、一度には一つのことしか伝えない、という自閉症スペクトラムの子ども達に適切なやり方で、こまやかに丁寧に指導を重ねていった。

このような関係性の中で、まず、彼の中には共感性が育っていった。最初は何でも理論立てて説明しなければ理解できなかった事柄も、「そういうことをすると、相手は悲しいよ。淋しくなるよ」といった、情緒的なふれあいが分かるようになっていったのである。K君の場合もそうであったように、今、若者の自立の障害になっているのが、社会的スキルの不足である。社会的スキルは共感性をベースに育っていくので、共感性が乏しいと社会的スキルは身につけにくいといわれている。このベースとなる共感性を身に付けたことで、K君の社会的スキルをはじめ、社会性はぐんと飛躍をすることになった。

また、社会性が全くないころは、宝の持ち腐れだったのだが、彼は知能指数が130あり、知的には非常に優秀だった。また、子どもらしい好奇心と、活動性の高さを備えていた。しかし、この好奇心も行動力も、その方向性と、段階的にかつ具体的に活かし方を導くこ

とができてはじめて生きるのである。そして、知的な能力を活かすには、その根底に、社会的な能力が欠かせない。子どもの特性を最大限に活かし伸ばすためにこそ、社会性を伸ばすことが求められよう。

また、K君は、西濃学園で、これまでさせてもらえなかったことを取り戻すかのようにさまざまな活動に取り組み、そして楽しむことを経験していった。苦手意識の塊であったスポーツにも取り組み、野球部に入った。自閉症スペクトラムの子ども達はスポーツなど身体を動かすことにあまり興味がなく、そうした活動が苦手であるという子が多いが、それも経験不足や訓練不足であることも多い。彼を見ていると、練習次第でかなり上達するのだと分かったし、忍耐力や欲求不満耐性や自己統制力を高めるのにも、スポーツの活用は効果があると思う。しかも集団で活動をすることで、挨拶や号令といった、儀式的ともいえる「型」や規律を行動で身につけ、その行動を一つの形式にしていくということも、社会性を身につける際に大きく役立ったことと思われた。

また、地域のボランティア活動にも非常に熱心に参加したり、文化祭においてもクラスを引っ張っていくリーダーとしての経験も積んでいった。

だが、何よりも、彼を変え、そして全体的な彼の能力を伸ばしたのは、口先ではない学園の「共に」という精神だっただろう。彼は、毎朝、人知れず、みんなが使うトイレを学園長と清掃することに誇りと喜びを持つことができる子どもに育った。そして、中学3年となると、みなそれぞれに進路に向けて動くわけだが、自分さえよければいいというのではなく、みながまとまって一つになって頑張っこそ、それぞれの力が最大限に発揮されるのだ、と協調を大事にしながらクラスをまとめている。

…僕は医者になることが夢です。でも、ただの医者にはなりたくない、常に「人の命を救う医者」になりたいと思っています。

彼の夢は、医師になり、発達途上国へ行き、恵まれない子ども達の役に立つことである。ただ、いい点を取るための勉強ではなく、自分の夢を実現するための勉強に突き進んでいる。

助け合うという経験を基盤に

Eさんも、K君と同じく、人のためになれる、そんな自分になりたい、と夢を語る生徒だ。

Eさんは、中学入学時から、寮に入り、まるっと3年間を西濃学園で過ごした生徒である。

彼女が小学校に入るころに両親が離婚をし、彼女と兄は母親に引き取られた。彼女は、小学校5年生の2学期から休みがちになり、3学期からは全く行けなくなった。きっかけは、女の子のグループ内のいじめだった。そのクラスのグループでは、その中の必ず一人は無視をされたり仲間外れにされる、という暗黙のルールのようなものがあり、それが彼女にも回ってきた。違うグループに行ってみたが、そこでも同じように仲間外れにされた。そのようなことが、繰り返され、グループを転々とするうちに、居場所がなくなり不登校になった。

その頃、ちょうど自分の部屋を与えてもらう、ということも重なったため、部屋から出なくなった。Eさんの両親は、彼女が小学生になるときに離婚し、子ども達は母親と暮らしているのだが、その母親とも全く話さなくなった。お風呂も半年くらい入っていなかったという。リストカットもしていた。同じ時期に兄も不登校であったため、兄妹二人で家に引きこもっていた。

西濃学園に入った頃のことを彼女は、このように振り返っている。

私がこの西濃学園というのを知ったのは、小6の秋ぐらいだったと思います。その時の自分は本当に不安定で、親ともあんまりうまくいってなくて、とにかく家を出たいという気持ちで寮の学校を探しました。そこで西濃学園を知りました。ここがいいって言ったのは私ですが、見学行こうってなったときに気持ちと身体が進まなくて、朝がイヤで仕方なかったのを覚えています。そんなこんなで見学して、正直西濃学園がよかったとか、悪かったとかそういうのはあまり記憶がなくてただその時は家を出れるうれしさと、前に進めたいという気持ちだったのかなって思います。けど徐々に入学が近づいて行くと同時に不安と怖さが一気に押しよせてきました。なんで学校なんて行かなくちゃいけないんだろ。でもこの先行かなかったら自分はこれからどうなるんだろう。そんな感じで毎日がしんどくてそれでも時間は過ぎてしまいました。小学校の卒業式も放課後に行く予定で、私も腹をくくったつもりで、着替えて、さあ行くぞって時に号泣してしまいました。怖かった。そんな自分がイヤで、なんでこんなに弱いんだろって、結局先生が家に来たんですが、先生や親への罪悪感、自己嫌悪感でいっぱい、そのときお母さんが「がんばろうね」って言ってくれて、とても支えられました。それで入学式。もう親には迷惑かけまいと泣かないと

決め、学園に向かいました。不安だけをかかえて、中学生になりました。入ったら、まず帰りたいと即思いました。スタッフさんが優しく話しかけてくれたものの、まともに会話できず、女の子とも話せず、つらい日々でした…

西濃学園に入学を決めた生徒達は、みな、挫折感や傷つきを抱えて、そして多くは、はじめて親元から離れて、慣れるまでは非常に心細くさみしい日々を過ごす。また、同年代の同性の友達との関係に難しさを抱えて不登校になる生徒も多いため、まずは、教師や職員といった大人とのいい関係をもとにして、学園生活に慣れようとする人が多い。彼女もそうやって、足がかりを作っていた。

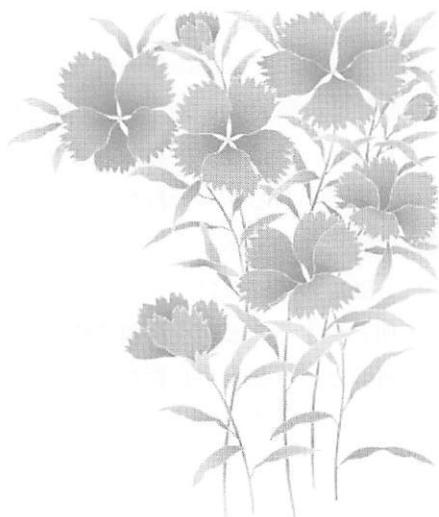
全く人に頼ったり甘えたりするところを見せず、きつくとげとげしい雰囲気で見寄りがたいEさんだったが、大人との関係の中で甘え、甘えることによってまたかわいがられて、と育まれるうちに、角が取れ、少しずつやわらかくなっていった。すると、先輩の女子生徒からもかわいがられるようになっていった。誰かにかわいがられることによって、かわいくなっていき、すると自然とみんなからもかわいがられやすくなる、という愛情の循環は、西濃学園の生徒達がみな経験する循環であってほしい。

不安と孤独感にさいなまれていた時に、このように、相手から近づいて気にかけてもらい自然と自分が和らいでいった、という体験は彼女にとってとても大きかったのだろう。西濃学園に新しく体験に来たり、転入をして来た女の子に対して、いつもそっと親身になってくれる生徒になっていった。彼女自身が、愛情の循環を与えられる側から、与える側へと成長していった。

…寮だから学園に向かわざるをえず、嫌々ながら毎日を過ごして、そんな中徐々に人とかかわる楽しさを久しぶりに感じられるようになりました。大人というのが怖くて、人を信じられなくて、けどここにきて、少しずつ心が開けて、人間って悪いもんじゃないなって思えたんです。それから月日がたち、書ききれないくらい、楽しいこと、辛いことたくさんありました。今でもあります。けど今の私はそれが、大人への一歩だと、受け入れることができます。人の傷みをわかることが出来ます。地元の中学校へ行っていたら経験できなかったことをたくさん出来ました。本当に幸せだと思います。だからこそものというんな経験をして、いろんな人と関わりたいと思いました。なので私は留学をしたいと思ったんです。壁をたくさん乗り越えてきた私だからこそ、たくさんの壁をこれからも乗り越えて行きたいなって思うんです。それは西濃学園の皆さんのおかげなんです。だからここにきて長い私は、みんなの力になりたいなって、引っ張っていきたくてまだまだ私だけどう思えるようになりました。ありがとうございます。誇れるような人になりたい

です。てか、なります。絶対に。

愛情の循環の中で、基本的信頼感を取り戻したり、より確かなものとして、「私はこの世に受け入れられているんだ、信頼してもいいんだ」と安心できると、その信頼感を自分の心の土台にして、自分の人生と自分を取り巻く世界を受け入れていくことができる。その後の彼女のさまざまな困難に対しての踏ん張りを見ていると、そのことを実感する。例えば、母親との関係は依然あまり良くなく、高校進学においても、ふたたび寮のある高校を探したこともあったが、互いに妥協をしたり歩み寄ることができたので、なんとか一緒に暮らせるだろう、と腹をくくって、Eさんは自宅から通学する高校に進学を決めた。また、責任感が強くなり、文化祭などでは、リーダーとして、クラスをまとめている。西濃学園も女子生徒が増えたが、みんなと分け隔てなく接することもできる。「私は、西濃学園でなかったら、中学生も不登校になっていたと思う。ここで3年間を過ごせてよかった」と話してくれるそんな彼女の言葉をとてもうれしく思う。



2. 自立に向けて本当に必要なことを問う学校

自分の力を信じることができる

Sさんの歩みを見ていると、その子にとって、その子の人生にとって、その子の幸せにとって、本当に必要なことは何だろうか、ということをお教えされる。

Sさんは、小学校の頃は活発で、リーダー的な役もよく引き受ける、明るく元気な子どもらしい子どもだった。しかし高学年になって、女の子の人間関係に行き詰り出す。幼いころはそれでもよかったのだろうが、年相応の発達と比べると、わがままで短絡的なところがあるので、なかなか同年代の女の子と良好な人間関係を築けなかったのだ。その時は、母親に学校へ電話をしてもらい、なんとかしてもらえるようにしてほしいと頼んでことは収まったという。だが、それから、困ったことがあると、母親をすぐ頼るようになってしまう。そして、思うようにならないことがあると、母親に何とかしてくれなれとせがみ、なんともならないと荒れたり、抑うつ的で無気力な状態になってしまうのだった。

その短絡性ゆえか、地元の中学校は入学3日目で嫌になったしまった。そして、本人の意志ではなく、親の強い意向で、中学2年から西濃学園へ転入となる。入学当初の彼女は、将来の夢を尋ねると、「(自分は)終わっとる」「何をやっても無駄」と笑うような、こころの乾いたさみしい女の子だった。

自分に希望が持てず、そしてさみしい、そんな思春期の子ども達が縋りたくなくなってしまふ一つが恋愛である。彼女の関心ごと、男の子に向かい、雑談の大半は異性の話だった。しかし、そのことは、さらに同性の関係を難しくもした。理不尽な嫉妬心や独占欲を出してしまい、とても攻撃的になってしまうのだ。

西濃学園に来て、すぐ、同級生の女の子と男の子を巡ってトラブルを起こした。そして、その女の子の悪口を一生懸命に母親やスタッフに訴え、何とかしてもらおうとしたり、しかし、どうにもならないと分かると、やはり学校を休むことが続いた。学校を変わっても、何も変わらないじゃないか、と言われるかもしれない。しかし、この挫折を繰り返すということこそが、子ども達には必要なのである。完ぺきなお膳立てをしてもらって、挫折をしないようにすることが、必要なのではない。そして、繰り返す挫折の中で、時間はかかったとしても、自分の力で何とかする、という経験こそがに必要なのだ。彼女の力を信じて、支えながら見守ることや待つということが必要なのだ。そうやってこそ、彼女は自分の力を信じはじめることができるのである。

言うは易しだが、何度も何度も同じ失敗を繰り返す人を受けとめること、これこそが成長の糧のひとつとなるのだ、という価値観を本人に、またその親御さんに伝えていくこと

は、このせちがない現代において容易ではない。しかし、精神分析には「反復強迫」という概念があり、人は、多少形を変えても、自分の人生の課題（物語）を何度も何度も繰り返す生き物である、という。それは、以前の自分にはできなかつた、という過去を少しでもくつがえし、よりよい自分になることをけっしてあきらめないという、無意識的な人間の力なのだ。「同じ失敗を繰り返すダメな人間」と見るか、「あきらめずになんとか幸せに生きたいとあがいている人間」と見るか、それは、なんと大きな違いだろうか。

また、そんなSさんの支えになったのは、教員でも、スクールカウンセラーでもなく、校務員であったことも、西濃学園の教育が大切にしていることの表れである。西濃学園では、事務員も、校務員も、教員と同じ強い関係性で子ども達と日々関わっている。このことが、社会に通用する人間を育てることに繋がっているのだと思う。今日、学校においても「多様性」という言葉はもてはやされてはいるが、現状の多くでは、教える内容についても、教え方についても、そして、教える人材についても、この多様性が失われているのではないだろうか。西濃学園では、他の職業を経験し、教師とは異なる社会を実体験してきた多様な人材が多くおり、学校とは異なる世界を教えてくれる。現代の閉塞的な学校の価値観の中で認められることが難しく、それゆえに、自分には価値がないと思込まされてしまった子ども達にとっては、大きな希望に違いない。

卒業を前にして、彼女はこんなことを書いている。

…ほぼ無理やり入れられて周りから、ふつうじゃないと言われることもありました。でも、それらを乗り越えて今こうして毎日学園に来れているのは、支えてくれたたくさんの方のおかげだと思います。そして、自分にも乗り越えられる力があることが分かったのでこれから色々な壁にぶつかるとは思いますが、一つ一つ乗り越えられたらいいです。

西濃学園の仲間と一年数ヶ月すごせたことに感謝します。本当に幸せ者ですね（笑）残りわずかの学園生活を大切に、大好きなブランドのショップ店員さんになれるようにがんばります！！！！

学習面では、決して意欲的ではないし、よって成績も確かによくない。時折、学校に相応しくない服装で登校して、指導を受けることもある。しかし、もう一度自分の力を、自分の価値を信じることができた彼女は、明るく健やかに笑う。

仲間に受け入れられているという実感

これから自立をしていこうとする若者にとって、仲間に受け入れられている自分を確認する作業は、不可欠である。このことは、親の助けだけではどうにもならない。自立には、外なる存在に受け入れられるということが必要だからだ。

Hさんは、小学校6年生の3学期に、親の離婚のため転校をしなければならなかった。ずっと通った小学校で卒業して、そのままみんなと中学にあがることを当然と思っていたため、この急激な変化についていくことができなかったという。慣れない土地で、知らない顔ぶればかりのところで、誰も頼ることができず、心細く、また、取り残されたような気持ちになった。次第に学校を休むようになり、中学へあがっても、気持ちを切り替えることができず、より孤立感を強めていった。もともとは、人なつこくて明るく、友達とじゃれあったりはしゃいだりするのが好きだったという。しかし、西濃学園へ、体験入学に来たときの彼女は、無表情で、ほとんどしゃべらず、意思表示もできないため、つかみどころがなく、どうかかわろうとすればいいのか戸惑ってしまうようなありさまだった。

しかし、母親代わりというか、母性的な役割を担っていくれるスタッフとのつながりをきっかけとして、体験の日数を彼女のペースで調整しながら、学園生活に慣れていき、中学2年生の3学期より、転入となった。

彼女は、西濃学園で過ごした日々を、こんなふうに戻っている。

私が、西濃学園に初めて来た日から約2年が経ちました。その頃の事を思い出すと今となってはなんでだったんだろうと考えちゃうときもあります。そんな私が、なぜ学校に行けず、西濃学園に来たのか、それは、小学6年生の時、名古屋に引っ越してきて急激な環境の変化についていけなく、学校を休んでいました。それで、だんだん家にこもることが多くなり、1カ月家から出なかった時もありました。そんなある日、母親から西濃学園という名前を聞きすぐにホームページなどでどんな学校かを調べたら、驚きの連続でした。まず驚いたのは、岐阜県の山奥にある事、次に驚いたのは寮生活ということ、唯でさえ、家から出たくないのにこんな所に行くなんて嫌だと思いました。母から西濃学園の名前を聞いてから、1週間か2週間ぐらい経ってから、学園に見学に行くからと言われ、家から出たくない今までの生活でいいなどと母に泣いて頼みましたが、もう学園の方に今日行くってお願いしちゃったんだから、迷惑をかけてしまうからと言われたので、嫌々ながら、学園に来ました。

まだ気持ちは、嫌でいっぱいだったのですが、私と同じ年の子で、同じ女の子が一人居るんだよって言われて、その子はどんな子なんだろうなど、いろいろ考えていたら、その子が、やさしく話しかけてくれました。その時、とっても嬉しかったし、楽しかったです。

こんな感じで学園に来て、最初は馴れず、1ヶ月に1週間のペースで来て一年経ったら、Eちゃんとすごく仲良くなり、だんだん心配であった女の子は、Sちゃん、Rちゃん、Fちゃん、Yちゃん、Mちゃん（NPO法人所属）と増えていき、今は、とっても、楽しく面白い毎日なので、とてもうれしいです。2年前の私に言ってあげたいくらいです。泣かなくていいんだよ。このあとには、いっぱい楽しい思い出がたくさんあるからって。

思春期、青年期の子ども達にとって、友達に受け入れられている、と実感できることがいかに大切なことか。彼女が書いたように、日々の友達との関係もとても大切であったが、彼女には、自分が受け入れられている、弱くて迷惑をかけてしまう自分だけを受け止めてもらえる、と強く感じる体験があった。

それは、中学3年のときの夏山登山である。

山のすばらしさや厳しさの中で、つらさを乗り越えた後の体やところにみなぎる達成感を体験するというのももちろんだが、無事に登山を行うためにはリーダーに従い、リーダーの指示を聞き漏らさず、互いに協力し合い、そして、みなが一つとなってやり遂げる、という集団の規範と喜びを学ぶために3年前から夏山登山を始めた。

彼女は、中学2年の体験時も、活動の一つとして、夏山登山に参加したが、散策コース（体力に応じて、登山コースと散策コースを用意してある）を途中でリタイアしていた。

そして、中学3年生の夏山登山では、まだまだ体力的な不安はあったものの、昨年自分とは違う、より成長した自分になりたい、と蝶ヶ岳への登山コースを希望した。しかし、やはり多少の無理もあったのだろう、登山の途中で体調を崩してしまう。腹痛を訴えたので、山にある診療所へお世話になった。診療では時間がかかり、その間、みなは彼女を待つことになった。「盲腸の可能性も否定できないため、下山後は大きな病院で検査を受けるよう」と言われたが、彼女の様子を見ていたリーダーの判断と、また彼女のたつての希望で登山を続けることを決断した。彼女のグループは、彼女の荷物を持ったり、自分のペースではなくゆっくりと登ったり、休憩を多く取ったりして、彼女のペースに合わせることとなった。そうやって、何とか無事に、全員が登頂し、またとない素晴らしいご来光の景色をみなで拝むことができた。しかし、次には、下山をどうするかという問題が待っていた。下山をしたら彼女と付き添いのスタッフを病院に残してみなは帰るか、彼女の診察の結果を待ってみな一緒に帰るか、どちらの決断をするか。結局、もし盲腸で入院せざるを得なくなったとしても、遠く離れた病院で入院することはできない、ということもあり、彼女の診察を待ってみなで一緒に帰る方を選択した。そのため、みなバスの中で長時間待つこととなり、西濃学園へ到着する時間は大幅に遅れた。診察の結果は、幸い盲腸ではなく、心身の疲れによる体調不良、ということで落ち着いた。このようにして、Hさんは、自分のためにみなが合わせてくれたこと、ある意味、自分のせいでみなに迷惑をかけてし

まったこと、それでもみなが自分を受け入れてくれること、を実感したのだった。当事者となったHさんにとって、かけがえのない経験となっただけではなく、Hさんに合わせなければならなかった生徒達にとっても、大切な経験となった。もちろん、中には、どうして自分が犠牲にならなくてはならないのだ、と不平や苦情を言った生徒もいたが、そこがまた、生徒と話し合えるいいチャンスなのだ。

この夏山登山での体験は、たとえ強くなくとも、迷惑をかけてしまうことがあったとしても、変わらずに自分を好きでいてくれて、受け入れてくれる友達が、仲間がいるんだ、という実感になったに違いない。このように培われた他者への信頼感をもとに、どんな友達とも、わけ隔てなく明るく親しく接することができるようになった彼女は、また、どんな生徒からも慕われる生徒となっていった。



勉強はできない、けれど

君だけではなく、勉強ができない生徒というのは、学校や教師が思った以上に、自信をなくし、劣等感に苦しみ、自己否定を強めていく。

適応に問題を起こしてきているということは、その子の特性が現状では活かされていないということである。発達障害や知能の研究は、子どもの能力にはしばしば大きなばらつきや偏りがあり、一人一人特性が異なることを明らかにしてきた。このように多様な子どもの特性において、強みとなる点や持ち味を活かし、一人一人違う問題点に対処していくことが望まれよう。その際には、特に、得意な情報処理の仕方と苦手な情報処理の仕方に着目をする、子ども達の学びに有効であることも明らかになってきている。

また、5教科に偏った学習内容にも問題があろう。当たり前のことであるが、テストの点数で測ることのできる力が全てではない。5教科的な学力にばかり目を奪われるのではなく、子ども達が持っている優れた点を認めて、そこを伸ばし、子ども達の自信を失くさせないようにすることが、最も優先して求められているのではないか。

I君は、小学校5年生の時、上級生から「嫌なことを言われた」ことをきっかけに不登校となった。が、それはあくまでも不登校になるきっかけに過ぎなかったと、学校側は捉えていた。I君は、それまで問題を起こすようなことはなかったが、ずっと学力が低かったため、このことによる学校生活の難しさがあらわになってきた、と見ていたようだ。彼は、性格的にもおとなしく、消極的で、へらへらとしているように見えてしまい、どう働きかけていっても「糠にくぎ」と、見えてしまうところがあった。そんな彼に対して、5年生の時の先生は、ラジコンなどを一緒にやって親身に関わってくれたが、次第に関わりがなくなっていき、6年生の時の先生は訪ねてくることもなかったと聞く。そして、中学進学の際には、地元の中学校はいじめてきた上級生がいるので絶対行きたくないということで、西濃学園に入学をしたのだった。

入学当時は、もともとのおとなしい性格に加えて、嫌がらせを受けたり、学校生活をきちんと送れず自信を失くしてきたこともあってか、常に周囲を警戒し、おびえている様子が見えがえた。しかし、放課後に仲間とラジコンをして楽しんだり、先生と一緒に散歩をしたり、話をしたりと、積極的に社会性や適応性を身につけさせるための様々なかわりを重ねていく中で、次第に自分の意志を表明できるようになっていった。

しかし、相変わらず学力は低く、本人の努力にそぐわない結果であった。西濃学園では、能力にばらつきの大きい生徒も多いので、少しでも子どもの特性に応じた対応ができるように、生徒全員にWISC系の知能検査を受けてもらっている。すると、彼は言語的な情報処理の力が弱く、特に聴覚的な言語の処理が苦手なことが分かった。そして、そのような難しさがあるのではないかと彼に確かめると、「早口で言われると何を言っているのか分からない」「どんどん進むとついて行けない」と答えた。そのため、抽象的な言葉で

はなく具体的な言葉で丁寧に教え、絵や図を使い、本当に理解できているかを一つ一つ確認しながら進めていくと、非常にゆっくりではあるが理解をすることができていった。よって、他人より少し遅いだけで理解はできるということを、本人にも自分の特性として自覚をさせ、その方向に努力とやる気を向けていった。すると、徐々に成績が上がり、それとともにさらに明るくなり声も大きくなっていった。

それでも、やはり学年が上がるにつれ、5教科の成績は大きな壁となって、彼に立ちほだかるようになる。しかし、西濃学園の学校生活は、5教科のペーパーのテストでその子が評価されるという評価軸が、相対的に薄くなるように工夫をしている。

たとえば、通常の授業においても、先生の教えることを一方的に聞く、という形態よりも、グループで話しあって発表をしたり、実際に作業をしながら発見し学ぶという、これまでの授業形態では落ちこぼれてしまいやすい情報処理の特性を持った子ども達にも対応できるよう工夫をしている。そして、もっとも大きな特徴は、西濃学園のオリジナルの「コラボレイト」という体験型の総合的な授業である。コラボレイトでは、地域の伝統活動やボランティア活動、もの作り、外部講師を招いての体験授業や社会見学、「いじめ」や「戦争」といったテーマをあつかった創作劇への取り組みなどを行ってきた。教室にとらわれない形で、さまざまな活動を通していろいろな人と出会い話をする、社会に出れば、ごく当たり前のことではあるが、そこから新しい世界が広がり、子ども達の興味や可能性が広がっていく。このコラボレイトを、もっとも重要な取り組みとして位置付けることで、社会には多様な価値観があり、社会に通用するというのはどういうことか、を肌身でつかむことができるのだ。

現在の日本の教育は、まだまだ受験制度に組み込まれているところが大きいので、子ども達の自己評価やときには自尊心まで、5教科の成績に左右されてしまいがちである。よって、可能な限り、子どもの情報処理の特性を把握して、それを活かし、少しでもスムーズに学習ができるように手助けをしていくことも大切だろう。しかし、それ以上に大切で、並行して取り組んでいかなければならないのが、価値観の拡充であろう。社会では、5教科以外にもっと大切で尊いことがあることをいかに実感できるか。このことも、学校教育が、子ども達の自立に、本当に役に立つかどうかを、問われているところだと思う。

I君は、「自分に合ったやり方であれば学ぶこともできる」ということ、そして「5教科の成績が全てではない」という教育の中で、勉強ができない、という劣等感の呪縛から解き放たれ、自信を回復していったと思われる。加えて、集団生活や、これまでの学校生活の中では出会うことのないような多様な人々との出会いを通して幅のある社会性を培っていった。彼にとって、最も大きかったのは、意思表示をはっきりとできるとようになったことだろう。たとえば、自分が困っている状況からただ逃げることしかできなかった彼

にとって、嫌なことは嫌だと主張できるようになったことは、大きな適応能力の獲得だった。このようにして、自分の気持ちをきちんと相手に伝えることができるようになると、彼のおとなしいところは、穏やかなやさしさとして発揮され、彼が苦手としていた高校生の上級生とも、お互いを大切にし合えるような仲間関係を自然と築くことができるようになっていった。



3. 安全の源となる学校

「人間は自己実現に向かって絶えず成長する生きものである」としたMaslowは、人間の欲求を、5段階のピラミッドのようになっていて、底辺から始まって、1段階目の欲求が満たされると、1段階上の欲求を志すという理論を呈した。下から、生理的欲求、安全の欲求、所属と愛の欲求、承認（尊重）の欲求、自己実現の欲求となる。学校とは、「承認の欲求」を刺激し、満たして、さまざまなことを教えて達成させていく場である、というのが最も分かりやすい捉え方ではないだろうか。しかし、この「承認の欲求」も、ひいては真の目的である「自己実現の欲求」も、その下にある「安全の欲求」が十分に満たされていないことには、たどり着くことが難しい。いくら熱心に教えようとしても、「安全」の基盤がないと、子どもは学べない、そして育てない。教育のために、まず「安全の欲求」が確保されなければならないのだ。

「文化」から

Rさんの国籍は、日本ではなく、中国である。中国の中でも、やや特別な地域だろう、香港に生まれ育った。父親が中国人、母親が日本人である。彼女の父親も母親も留学をし、大学院を出ている。高学歴で、非常に向上心が高く野心的な人生を歩んできた人達だ。Rさんも、幼いころから、競争心が強かったという。

そんな彼女が不登校になったのは中学1年の3学期のことだった。入学当初は、新しい友人もできたが、小学校の時のヨーロッパ系ののんびりした子ども達と違い、中国系の気のきついクラスメートが多く、いじめが多かったそうだ。また、中学校では、宿題が非常に多く、次から次へとテストに追われ、何でも完璧にやらないと気が済まない彼女は、心身ともに限界となってしまった。「学校が大嫌い」と言い、笑うことができなくなっていった。幼いころから良い成績を取ることが大切だったし、本当は良い成績を取って良い子だと思われたいが、学習に対する競争の激しいところで何事も完璧にやろうとしたため、潰れてしまったようだ。そして、そんな現状から逃避するように、コンピューター依存症となり、パソコンを取り上げる母親を殴ったり蹴ったりするようになったので、家族はたびたび警察に通報もした。また、精神科に入院させたこともあった。この頃は、「養子に行きたい」「性転換手術をしたい」と叫んでいた。アイデンティティ、すなわち自分というものが崩壊し、何もかも否定することしかできない、性も自分のルーツもすべて受け入れることができない、という状態だったのだろう。

その後、やや落ち着きを取り戻したものの、香港では、中学3年時で、将来のコースを決めなければならず、不登校をしていた期間のあるRさんは、進学コースに進めないことは明らかだった。しかし、そうなると、これからの進路が狭くなってしまう。そのため、

将来を見越して、日本の学校に移ることを決めた。そして、不登校生のための寮のある学校をホームページで探し、西濃学園の自立を支援する姿勢に賛同され、転入の運びとなった。

彼女の背負っている課題は、彼女の父や母が背負ってきた課題でもあり、また、文化的な力の色濃い、根の深い課題だった。現代の中国のエリート層には、弱肉強食、すなわち強くなければ、優秀でなければ生きる価値が無い、という価値観が充満している。両親は、そんな中で生き伸びることができた、「強い」人間だった。当然のようにRさんにも、そのように生きることを求めた。彼女もそのような価値観の中で育ち、不登校になるまでは、その文化の中で成功していた。

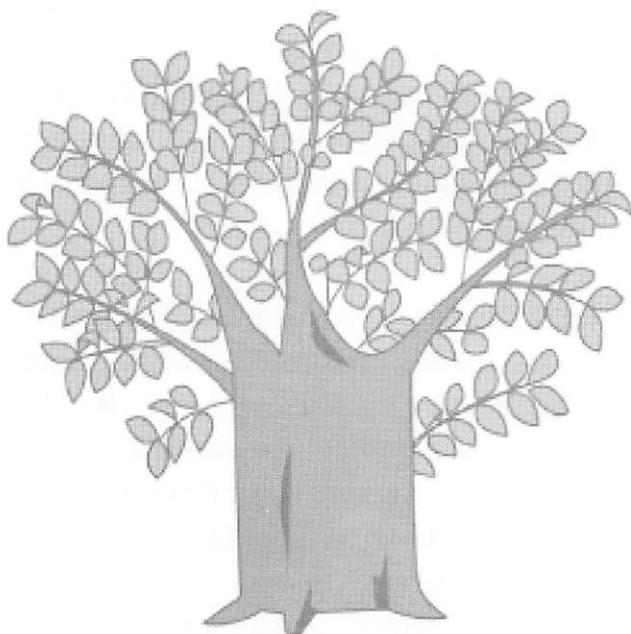
しかし、挫折をしてしまう。弱く、負けた者は、排除されるしかない文化である。一昔前の、学歴主義に狂った日本もそうだったかも知れない。しかし、そんな彼女も、そのような文化を離れ、子ども達の「あるがまま」を受け入れる西濃学園で、再び生き活きと始めた。少しエネルギーを取り戻した子ども達は、誰もがそうなのだが、もう一度、自分が乗り越えるべく、同じような問題を繰り返し始める。彼女の場合は、ライバルだと思った生徒に嫌悪感を表し、また学力や体力で劣った生徒に対しては否定感情をあらわにするようになった。その感情は次第に日本を否定するまでに膨れ上がっていき、「ここでは自分の可能性を思うように伸ばせない」と、帰国を切望するようになった。

しかし、弱さを、弱いものを否定する生き方を続ける限り、彼女は、また、完璧な自分を目指して生きていかなければならなくなる。そのような生き方しか、是とできなければ、いつかまた挫折をすることは目に見えている。彼女にとっての真の成長とは、エネルギーを取り戻して、もう一度完璧を目指して頑張れる自分になることではない。他者とのかわりの中で、弱さや、弱いものに寛容になれたり、互いに認め合うこと経験すること、その経験を通して、自分の中にも弱い部分があることを認め、受け入れていくことこそが真の成長なのではないか。また、人間の弱さをただ否定して、ないものにしていくのではなく、自分の中にも他者の中にも同じような弱さがあり、それを許し合いながら、その上で自らを磨いていくことが新しい強さなのだとも考える。

何とか帰国を思いとどまった彼女に、一つの転機となることがあった。これまで、女子の寮生は人数が少なかったこともあり、個室で生活することが可能だった。しかし、生徒数が増え、女子も二人部屋にならざるを得なくなったのだ。誰かが、誰かのために、我慢をしなければならなくなる。男子の場合は生徒数が多いため、必ずといっていいほど相部屋にならなければならないため、教師側が、生徒の性格や行動を吟味して、寮の部屋割りを決めてきたが、女子にとっては、はじめての相部屋の部屋割りとなった。この部屋割りを決める際は、教師も立ち会いながらではあるが、全く口を出さず、女の子達の話し合いを見守っていた。同じ学年だけではなく、異なる学年も混じり合いながら、同年齢代の

女の子の人間模様が噴き出す話し合いである。その中で、Rさんは「私はどうしても、二人部屋になることができない」と打ち明けた。すると、彼女が嫌悪感情や否定感を表していた女の子達が、「じゃあ代わりに私達が」と二人部屋になることを引き受けてくれる。そのことに対して彼女は感謝をし、「移動や片付けはできるだけ手伝わせて」と申し出た。自分の弱い部分を表わさなければならず、また、勉強ができないから、運動ができないから弱いと見下していた仲間達から助けられる、という体験は、彼女の硬直した価値観に風を通して、理想とする強さに対して疑問を投げかけてくれたのではないか。

自立や成長について日々問いながらも、しかし一貫した方向性を学園全体で共有する、というしっかりとした大きな枠組みがあることで、子ども達は守られていると感ずることができ、安心ができる。そして、その中で一人一人が自分の課題を表現することを励まされながら集団生活を営んでいくことができれば、学園の目指す自立や成長に向けて自ずと育っていくことができると信じている。



「家族」から

先のK君も、その根幹には「家族が成り立たない」という問題を抱えていた。「成り立たない」まではいかずとも、「行き詰ってしまい、家族だけではどうしようもできない」という家族は少なくない。Fさんも、そのような家族から、ほとんど逃げるようにして、西濃学園へ来た。

彼女が不登校になったのは、中学1年の2学期だった。父親、母親、共に学歴が高く教育熱心な家庭に育てられた一人娘である。受験をして入った中学だったが、校風や受験指導のきつさや女子の人間関係など、少しずつ様々なことが重なって、学校へ行けなくなっていった。学校へ行けなくなったことをめぐっては、家庭では、壮絶なやりとりの毎日が続いた。

不登校になる以前も、自分の意見を通さないとおさまらない母親の価値観にがんじがらめにされ、反発しようとするやと殴られていた。Fさんは、母親のやり方は身体的、精神的な虐待だ、と受けとめるようになる。ついに耐えられなくなったFさんは、叔母のところへ家出をした。以前からわだかまりのあった母親と叔母は、Fへの関わり方めぐってさらに対立を深め、また叔母がFさんを煽ったため、Fさんと母親の溝はさらに深いものとなってしまった。そして、絶対に家には帰りたくない、しかしいつまでも叔母のところ炉でお世話になるわけにもいかない、と、察のある学校を探し、中学3年生になる直前に、西濃学園へ来たのだった。

Fさんも、西濃学園へ来ることで、追いつめられた状況から離れることができ、また、当面の間、その安全が確保されたため、再び、勉学にスポーツにと、生き活きと活動をし出した。しかしながら、家族の問題は、分かり合えずに行き詰まったままである。K君の場合とは異なり、親の方はFさんと和解を望んでいた。

子どもの問題に対しては、よく「親が変われば子どもは変わる」と言われる。それも間違っていないだろう。しかし、親も変わるには、相応の勇氣と苦しみと時間が必要なのだ。子どもに「安全な退避場所」が必要なことがあるように、親にも「安全な退避場所」が必要なことがある。西濃学園では、親を責めたり、無理に諭すのではなく、親も一緒に育つことができるように、まるごと受け止められている、守られている、と感じてもらいたい。西濃学園では親の学習会も開いていたが、そこで、「子どもの自己肯定感ばかり強調されるけど、誰か親の自己肯定感を考えてくれていますか」という発言があった。不登校の子どもを持つ親は自信を失いやすい。そんな親のペしゃんこになった心にとっても、「安全な退避場所」は必要なのである。そして、Fさんの親は、西濃学園の関わりの中で、子どもとの関わり方をとっかかりに、夫婦の関係を、ひいては自分を見つめ直すことに取り組み始めている。

最終的には、他者の力も利用しながらも、自分達家族の問題を自分達家族で何とかできるんだ、と信じることでできる家族になってもらいたいと願っている。そのためには、Fさん親子には、これから何度も向き合うことが必要だろう。ただ逃げるだけで精いっぱいだったFさんも、「私には西濃学園がついてくれているから」という学園への信頼感の中で、まだ一方的にはあるが、これまでの思いを、親にはじめて吐露することができた。まだ、始まったばかりではあるが、よりよい家族になるための場を支え、時間がかかったとしても、それを見守る学校も必要なのである。

Fさんが、今の自分について以下のように書いている。

中学2年生の秋ごろからいとこの家で生活し始めた。「親」を受け入れることが出来なかったから、学校へ行くことも拒んでいた。また、学校での人間関係の汚さが嫌で教室に行こうと思えなかった。しかし、勉強しなくてはいけない、という焦りもあった。その中で私は「転機」が欲しかったのだと思う。いとこの家にいったその日から、教室には行けないけれど、学校には行ける日がでてきた。病院にも行きながら、親のこと、自分のこと、学校のこと、いろんなものを見つめ直した。

親のことは、「娘」として親を受け入れられなくなったのだろう、と感じた。小学生のころ、ピアノと勉強ばかりしていた気がする。ピアノはコンクールばかりに出て、上手くひければ親は笑顔で、練習に手を抜けば泣かされた。また、勉強も成績が悪いと怒られて、毎日毎日勉強をしていた。それが自分のためになるか、ということは考えられる程大人でもなかった。何をするにも結果重視だったと思う。最近までそんな期待が嫌だった。しかし、そのことを友達に話したら、「甘ったれてんな。期待されない人間もいるんだ」といわれた。最初はその友達に怒ったが、その通りだと思う。無理はしないようにしながら、がんばらなきゃ、と思えるようになった。

この学校に来た時は親のことがまだまとまっていなかった。前の学校から転校をすすめられて、親から離れて生活できて勉強できる環境が欲しかった。そこでインターネットでこの学校を探した。この学校でうまくやっていけるか不安だった。また、親元から離れて暮らすという不安もあった。

今は、この学校に来て、良かったと思う。勉強もしているし、人とのつながりがちゃんともてるようになった。親のことも客観視できるようになった。しかし、神奈川にいる、私のことを支えてくれている友だちになかなか会えないのは、少し寂しい。

最後に、これから先もとても長いと思う。高校に行ったら、小学校や中学でできなかったことをしたい。具体的には、たくさん遊んで、たくさん体を動かしたい。将来は、大学の研究室で生物の研究をする仕事に就きたい。しかし、これは二つ目の夢。一つ目の夢は、

一緒にいて心の底から安心できて、楽しくなれる人になりたい。簡単なことじゃないと思うが、がんばりたい。

今までも、たくさんご迷惑をおかけしました。これからもご迷惑をおかけすると思いますが、3年間、よろしくお願いします。

彼女は、西濃学園中学を卒業した後、西濃学園の寮で生活をしながら、通学できる高校への進学を希望している。自分か潰れることなく高校生活を送るためには、まだもう少し、家族から離れている時間が必要だ、ということだった。

ご縁があって、関わりを持った生徒やご家族なのだ。卒業まで、と区切ってお付き合いではなく、さまざまな形で、できる限りの支援を続けることが必要なこともある。



「地元」から

残念ながら、Tさんは、西濃学園の学園らしい教育で関わるができなかった生徒である。

Tさんは、小学校2年生の時、給食を無理やり食べさせられてから、登校できなくなった。以降、さみだれ登校を続けていたが、小学校5年生の時に、市の適応教室に1年間通うようになった。小学校6年生からもう一度、学校復帰を目指す、そこでも養護教諭の先生との折り合いが悪く、登校できずに自宅にいることが多かった。心療内科では、「適応障害」「情緒障害」と診断を受け、少人数の集団での環境が望ましいとの見解もふまえて、西濃学園へ入学をした。地元の中学へは、Tさんの兄の件で、母親の嫌悪感、拒絶感が非常に強かったということも大きかった。

入学後は、入学式から通常通り登校をした。給食は食べられず、教室か「こころの部屋」というカウンセリングルームで、自宅から持ってきたパンを食べた。最初は職員が同席して、一緒に食べたが、彼女が一人で食べることを望んだため、1学期後半からは一人で食べてもらうようになった。

授業への取り組みは良好で、成績も上位であった。人間関係は、女子生徒よりは、男子生徒との交流が多かったが、なんとか築けているようであった。しかしながら、授業の変更や帰宅時間の変更は、受け入れることができずに、母親を通して不満を伝えることがしばしばだった。また、西濃学園の柱の一つである、社会性を培うための「コラボレイト」と名打った体験活動には参加できなかった。というよりも、参加する意思が全くなく、母親も同様であったため、必要性を伝えきることができなかった。学校としても、まだまだ未熟だった。それから2年を経て、自閉症スペクトラムの子ども達や、そのご家族の理解や接し方について、様々な研修を行ったり、試行錯誤をしながら経験をつんだ、現在の西濃学園であれば、もう少し異なった、より適切なアプローチができたかもしれない。しかし、Tさんは、「学校のことはおおよそわかったので、行く必要がなくなったから、登校しない」「高校も行く必要はないから、出席はいらないんだ」と言って、中学1年生の2学期以降、登校をすることはなくなった。西濃学園は、あくまでも「学校」で、「学校」という形態をとるところは、受け入れられない、ということだった。それからは、彼女用の学習プリントを5教科分用意し、母親を通して、やりとりを継続をした。学習プリントのやりとりでは、通信教育サービスのような、きめ細かな添削を行った。また、返ってこないと分かっているにしても、必ず一言メッセージをつけて渡すようにした。押しつけがましいメッセージにならないようにと気を配りながら、明るい話題を探し、いつでも学園はあなたを受け入れる気持ちで待っているよ、ということを伝え続けた。

また、「学校」への否定から「高校へ行く必要はない」とかたくなだった彼女だが、徐々

に進学について現実的に考えるようになっていった。もう一度、彼女が人と関わることを学ぶ場所として「学校」を選択したことを喜び、彼女の希望に添いながら、少しでも彼女に合うだろうと思われるところを母親と探しながら、快く送り出すサポートをした。それでも、一度掛け違えたボタンを直すことはできず、不登校のまま、彼女は卒業となりそうだ。

しかし、そうはいつでも、Tさんは公立の中学とは比ではない高い授業料を払ってでも、地元の中学に戻ることは選ばなかった。母親の意向を汲み取ってのことかもしれないが、Tさんも、地元の中学に籍をおくことは耐えられないからだ、という。西濃学園に対しては、そこまでの、強い嫌悪感や拒絶感を持たなかったからだ、と思いたいものである。たとえ学校でも、たとえ教師でも、否定をされると、つい否定で返したくなってしまいうものである。しかし、そうなると、後はもう否定の応酬となり、憎しみは憎しみを生み、それが雪だるま式に大きくなっていくことも分かっている。子どもを守らなければならないときは例外であるが、たとえ、理不尽に感じたとしても、否定に対して否定で返すことはしない、というのが教育に携わるものの規範である。

Tさんのように、地元の学校に対して、強い恨みを持っている場合もあるだろう。そうでなくとも、地元の学校には絶対に行けずにまた3年間を不登校のまま終わるだろう、学校を変ったとしてもやっぱり不登校のままかもしれないけれど、それでも一縷の望みにかけたい、と西濃学園を選択される子ども達やご家族達がある。地元というのは、なんといっても、自分が生まれ育った地域であるから、いつかはその地に愛着を持ってもらいたいと願う。しかし、そのために、一時的には、地元を離れることが必要なこともあろう。これまでのしがらみや、近所の人達目といったものから解き放たれて、伸び伸びと自分らしさを出して成長できる場として利用できる学校、としても機能できればいいと思う。



「自分」から

ときには、自分を取り巻くすべての状況から逃げるために、「自分」からも逃げなければならないことがある。N君もそんな一人だ。K君のところでも、一部触れたが、自閉症スペクトラムを形作る本質の一つに「解体不安」という、非常に原始的で、しかしなかなか一般のものには実感として分かりにくい質の不安がある。自閉症スペクトラムの子ども達は、感覚過敏のため常時、刺激過剰な世界に生きているため、この「解体不安」にさらされ、慢性的に自我解体の危機に直面している。自我というのは統合を繰り返して発達をしていくものだが、この解体にさらされることで、なかなかまとまることができず、したがって崩れやすく脆い自我のまま、大人になってしまう、ということも起こり得る。そして、この自我の解体という危機的事態に切迫感を与えるような、侵入的で介入的刺激を避け、変化を最小限に止めるため、特有の自閉症状を形成し発展させていくという。つまり、一見、自閉的な症状に見えるもの、こだわり行動であったり、ときには外界からひきこもるということもあるだろう。こういった症状は、不適応行動として映る。しかしながら、その不適応行動によって困ることよりも、より重大で深刻な、自我が壊れてしまうという問題から、自分を守るために、その子が何とか編み出したやり方である、という理解もできるのだ。いや、そのような理解に立って、自閉的な症状を見ていくべきなのだ。

N君もアスペルガーと診断を受けている、自閉症スペクトラムの生徒である。N君は、中学1年生のとき、また2年生のときにも、クラスで嫌がらせを受けた。クラスの、人にちょっかいをかけたりいたずらをしたり、授業中に騒いだりする生徒がゆるせず、注意をしたことがきっかけで、その子から絡まれるようになったのである。外界の様々な刺激に対して弱い彼にとっては、ちょっかいを出してくるといった介入や、授業中に騒がれる、ということ自体、とても苦痛だったに違いない。しかも、それが自分に対して向けられてくる、ということに耐えられなかったということは想像に難くない。

そうやって、だんだんと学校へ行けなくなってしまった彼を何とかしようとして、ある個人開業の教育相談所へ、彼と彼のご両親は通うようになった。その教育相談所は、課題を与えて、それができなければ、彼の自由を一つずつ制限をしていく、そして与えた課題をクリアできたら、また自由を戻していく、という学習理論に基づいた指導を行うところであった。彼は、与えられた課題を継続してこなすことができず、パソコン、そしてゲーム、漫画、最後には小説を取り上げられていった。最後の小説を取り上げられた後、彼は、ただ硬直するだけの全くの無反応な様相を呈するようになってしまった。

その教育所の方針で、少しずつ適応的な行動ができるようになっていく子ども達も多いうだろうが、自閉症スペクトラムの彼にとって、ゲームや漫画や小説の世界というのは、彼を現実の過度な刺激から守ってくれる避難所で、また、その空想の世界でつかの間の仮の「自分」を生きることが、崩れやすい「自分」をなんとか持ちこたえるやり方だったのである。それを全て奪い取られて、自分を守ってくれるアイテムを身包みはがされたこと

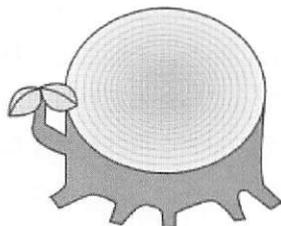
によるショック反応、そして、最後の捨て身の方法として「自分」からも逃げるように、閉じこもったのだと思われる。

このように、漫画や小説の空想の世界に頼らずとも、意識を手放すだけでいい、という自給自足で現実逃避可能な、究極のやり方を身に着けてしまい、より自分を保つことが困難になった状態を引きずりながら、中学3年時に西濃学園へ転入をしてきた。調子の良いときもあったが、学園でも、無反応状態に陥ってしまうこと、あるいは死んだように眠り続けるという、「自分」から逃げるために「自分」の殻の奥深くに閉じこもっているような日々が続くこともあった。

自閉症スペクトラムの子ども達と接するとき間違えてはならないことの1つであるが、自閉的な行動や症状に対して、それを何とか取り除きたい、と自閉の殻を無理にこじ開けようとしてしまうことがある。しかし、それは余計、彼を危機的な状況に追い込み、成長の機会を壊してしまうことになるのだ。このような考え方の転換は、これまでの学校教育の考え方だけではなかなか難しく、臨床心理の専門家の指導によるところが大きかった。N君と試行錯誤を重ねながら関わる中で、侵入的、介入的になり、N君の不安を喚起させてしまったことも皆無ではなかったが、それでも、最低限の生活リズムと集団生活を守らせながら、彼の「自閉」が守られることも大事にした。

また、それとともに、彼の崩れやすい自我を、少しでもまとまったもの、安定したものにするための、自己イメージ作りというところの作業にも取り組みだしたところである。これは、非常に時間のかかる作業であると思われるが、彼の社会的な適応を支えていくためには、大切な作業だと考えている。

少しずつであるが、「自分」から逃げる、という頻度は少なくなり、進路に向けて取り組む姿勢も出始めている。



4. やり直したいと思えたときにやり直せる学校

中学3年の2学期になって、編入をしてきた生徒が3人いる。A君、S君、Yさんだ。瀬戸際になり、やっと動き出そうとした、A君、S君、Yさんだったが、思いはあっても、当然のことながら、急に動けるわけではなかった。3年生の2学期ともなれば、進路の決定がもう間近に迫り、教師側も、生徒以上に焦ったり、つい発破をかけたくなる時期である。しかし、ただ、次の進路に繋ぐことが、西濃学園の教育ではないし、西濃学園の意義でもない。子ども達が、「思い」だけではなんともならないそれぞれの課題を持っていることを適切に理解し、それぞれのペースでの課題の克服を支えること。そのことこそが、「もう一度頑張りたい」と動き出そうとした子ども達が、たとえまたうまくいかないことがあったとしても、「もう一度頑張りたい」という気持ちを持ち続けることを励まし続けるのだ。学校へ行けなくなって、意欲や学ぶ機会を失ってしまうことになってしまったが、もともと、知的な能力の高い子ども達が意外なほどたくさんいる。このような子ども達が、もう一度、自信や意欲や本来の自分を取り戻し、未来へ夢を描くことができるようになってほしいと願う。このようなチャンスにめぐり合うことができたか、できなかったか、それは、その子どもの将来、長い人生においても、自立をできて社会に出ていけるかどうかの大きな岐路となるのではないかと思う。

丁寧な出会いを

N君が不登校になったのは、中学3年生の1学期だった。いじめによる、人間不信が原因だった。中学1年生の頃から、部活でのいじめが続いていたのだが、そのメンバーと同じクラスとなったため、クラスでもいじめられるようになってしまった。すると、これまで、友達だと思っていたクラスメートからもいじめられるようになり、人間不信となる。しかし、部活動の顧問の先生をはじめ、学校側にはほとんど対応をしてもらえなかった。そして、ちょうど、通っていた塾の先生が、「いじめられるのは、いじめられるやつが悪い」「そんなやつは、どんどんいじめてやれ」と、いじめを助長するような先生だったため、大人に対しても彼の不信感が強くなっていった。また、彼には、アスペルガーと診断をされ、訓練施設へ通っている兄がいるのだが、長期にわたり家庭内暴力がひどく、A君も兄から持続的に激しい暴力を受けていた。そのことに対して、いまだ恨みや憎しみは消えず、彼の人間不信の根っこにもなっていたと思われる。人間に対して、ひどい恐怖心を持ちながら、しかし、このまま自分の将来を潰されたくない、あきらめたくない、という思いで、なんとか自分を奮い立たせて、西濃学園へ来たのだった。

N君が、転入を希望し、体験に来たのは、中学3年生の夏休みだった。人が怖いため、生徒達がみな帰宅をしているときでないと、来ることができなかった。彼が入学をしたと

きに、一人くらいは知っている顔があった方が、心強いだらうという配慮のもとに、クラスメートとなる一人の生徒と交流の機会を設けた。意外にも、N君は、何事もなく学園で一晩を過ごし、クラスメートとなる生徒とも打ち解けた様子で、「2学期からは寮に入り、頑張っ^て遅れを取り戻したい」と言うほどであった。しかし、それは、彼にとっては気力をはじめ、持っている力を全て出し切って、やっと成し遂げたことだったのだろう。体験の後には、また、自分の殻に閉じこもるようになり、母親に不安ばかりを訴えるようになった。当然ながら、母親も、一度希望を持ったばかりに、さらに、不安になった。しかし、学園の、彼の「頑張りたいんだ」という気持ちを信じて、応援をして、少しでも頑張れたところを認めていこう、という方向性を伝え、たとえ時間はかかったとしても、本人と家族と学園が結束をして、同じ目的を持って歩むことができれば、絶対になんとかできる、という信念と希望を共有して2学期を迎えた。

2学期の初登校の日は、母親が兵庫県から約4時間かけて、車を運転して、やってきた。しかし、彼は、車から降りることもできなかった。「人が怖い」と、そして「そんな自分が情けなくてたまらない」と泣きながら帰って行った。不安や恐怖を抱えながら、それでも、来ようとした彼をねぎらい、「やっぱり行けないかもしれない」という懸念を持ちながらも労をいとわず連れてきてくれた母親に感謝を伝えた。このようにして、出会いが始まった。

以後も、彼は、人に会うことに強く怯えていたため、校舎から少し離れたところに建っている別の部屋への登校からはじめた。母親の仕事の都合のため、週に3度、最初は3時間ほどを、その部屋で、本人と母親と、すでに面識のある学園長やスクールカウンセラーだったり勉強をして過ごす、そんな通学形態だった。片道4時間以上かかるため、母親と彼は、朝6時前には兵庫の家を出て、高速を使い、登校してきた。少しずつ、会える先生の顔を増やし、母親も仕事の曜日を都合して、登校日も増えていったが、なかなか、みなと同じ校舎へ這入ることは抵抗が大きかった。

よく、教育手法では、スモールステップ、とか、本人のペースをまず大事にして、といわれるが、その一歩を進めるとき、背中を押すとき、の判断というのは難しいものである。彼の場合も、強く背中を押し過ぎたため、とても心細い気持ちにさせてしまったり、学校への不信感を持たせてしまったこともあった。しかし、そのたびに、多くのいろいろな教師が、彼や母親の気持ちを丁寧に聴いた。一人の教師が深く全面的にかかわることが適切な場合もあるだろうが、多くの教師が彼や家族のことをよく知っており、同じような態度でかわることが、より学校全体への信頼感を深めることもある。

このようにして、10月には、同じ学校の校舎には入ることができるようになった。もちろん最初は、クラスに入ることはできずに、他の教室で勉強をしていたが、彼と、自分

のペースについてよく話し合いながら、クラスで授業を1時間だけ受ける、次は2時間、そして皆と昼食を一緒に取れるようにと段取りをしながら、進んでいった。そして、再び、寮の宿泊体験を経る。一晩から、徐々に日数を増やしていき、11月より、正式に寮生としても、入学を果たしたのだった。11月の学園祭では、クラスの一員として全ての出し物に参加した。皆の前で、堂々と発表もこなす姿に、母親も涙ぐまれていた。本人と家族と学校の思いが一つになったときの力というのはとても大きいものだ。それは、どのように出会うことができるか、最初のつまづきのときにいかに手を繋ぐことができるか、ということがいかに大切かということでもある。

また、転入からこれまでを振り返って、彼が書いたことを読んでいただきたい。

対人恐怖のメカニズムは「投影」という防衛機制で説明することもできる。「投影」とは自分の心の中にあることを、他人が持っているように思いこむことだ。たとえば、自分がある人を憎んでいるとする。憎しみという感情は自分の中にあるのだが、それを認めることができず、相手が自分を憎んでいると考えるのがその一例だ。つまり、「人が怖い」ということは、すなわち、自分の中に憎しみや怒りがあるということで、その自分の中にある憎しみや怒りに怯えている、ということでもある。よって、誰の中にもあるそのような気持ちを認め受け入れることこそが、人への恐怖心を超えることにつながる。

彼の希望を全て聞いてあげたから、彼が傷つかないようにとだけ配慮したから、彼が人間へ信頼感を取り戻したのではない、ということを知っていただけだと思う。大きな信頼感という基盤のなかで、信じたり裏切られたり、傷つけたり傷つけられたり、そういった体験の積み重ねこそが、人への、ひいては自分への信頼感を形作っていくのではないか。

今、思い返してみると、たった数ヶ月前の自分はなんでこんなにちっぽけな事で悩んでいたのだろうと思います。

ついこの間まで何時間もかけて岐阜まで来たのに車から出られずにすぐ帰ってしまったり、夏休みのときに1日体験で来た時には普通だったのにその後はちょっとしたことがすごく怖くなって逃げ出したり、死んでしまおうかと思ったり、慣れてしまえば簡単な事なのになんであの一歩がふみ出せなかったのだろうと思います。

けど、今の自分はクラスの皆とふざけあうこともできるし、遊ぶこともできます。この半年で自分はどれだけ変わることができたのだろう。それを思い返すと、あきらめずに最後まで協力してくれた母親と先生、そして西濃の友達がいてくれたからこそ自分は変わることが出来たのだろうと思います。

自分がここに来る前、兵庫県にまだ居た頃はなんで僕だけがとか、だれにも話せなかった家庭の事情とかが、簡単に打ち明けられたり、話すことが出来ます。今までの学校で一人もできなかった自分を打ち明ける友だちが、この西濃では何人も作る事が出来ました。

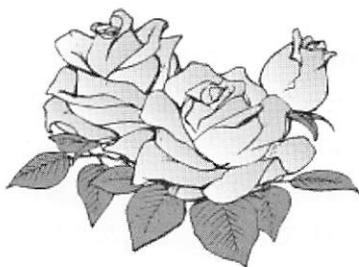
それは、同じような経験をしたり辛い思い出を持っている人達がたくさん居たからできたことだと思います。

もちろん、皆を見ていると嫌なところもたくさん見えてきます。そして、自分の悪いところもたくさん出て来てしまいます。ここにきて、やっぱり陰口や悪口が聞こえてしまうことはたくさんあるし、自分もつい口に出してしまうことがあります。ここを直すべきなのか、直せるのかは自分でもまだ分からないけど、自分だけでももう二度と言わないでおこうと反省しました。

もうあと3カ月で自分は西濃学園を去り新たな世界に行きます。自分が将来何になるかなんて考えたことはあるけど、まだ全然見当もつきません。それに大人になるまでにもさまざまな試練を乗り越えないといけないと思います。だけど自分がこの半年で経験したり、苦しんだことを考えればもう何も怖くありません。ただ前向きに、良いイメージで前に生きて行こうと思います。

ここで学び感じたことはきっとこれからの自分の大きな糧になると思います。本当にあのまま兵庫で嫌な気持ちのまま卒業せずに、この西濃に来てよかったです。

親に、先生に、そして皆に感謝の気持ちを持ったまま、西濃学園を卒業したいです。



丁寧な理解を

S君が、はじめて西濃学園に見学に来たのは、夏休みに入り、暑さが厳しくなり出した頃だった。学園に着くや否や、暑さでへたばり動けずに、ソファに倒れ込む彼がいた。おそらく、それまで引きこもることしかできなかった彼にとっては、苦手な暑さや、その暑さによって奪われた体力の問題だけではなく、緊張や不安も極限的な状態だったのだと思われる。

自閉症スペクトラムの子ども達にかぎらず、不適応を起こしやすい子ども達の中には、さまざまな感覚器官が過敏だったり逆に鈍かったりする、という特徴を持っている子どもが多い。食べ物の好き嫌いや、アトピーなどもその一つと考える。このような理解ができれば、彼を無理に動かせようとしたり、姿勢のよくないことを叱って、きちんとさせようと指導することが、彼を追いつめ、さらに自分の殻に閉じこもらせてしまうだろう、ということが分かるだろう。

そこで、彼の「動けない」という状態を受け入れ、少しでも涼しいように配慮をしながら見守り、回復を待つというケアを重視した対応を取った。A君然り、「出会い」のときに、自分の課題が何かを、象徴的に教えてくれる子どもは多い。出会う側が、いかにアンテナを張って、子どもからのメッセージを受けとめることができるかどうか、ということが求められる。彼にとっては、「身体性の回復」というテーマがひとつ、鍵になるのではないかと理解ができた。だから、「自分の思い通りにならない身体を、否定されるのではなく、いたわりながら受け止めてもらえる」という出会い方ができたことが、彼の学校への不信感、学校での人間関係への恐れを和らげるのに、大きく役立ったと思う。

その後、彼は夏休み中に、1週間の体験を希望した。学園には、街の生活より、思い切り自然の中で遊ぶことが大好きな子ども達がたくさんいる。彼は、そのような生徒と一緒に、大好きな川遊びをし、また、小さいころから図鑑が友達だった彼は、存分に昆虫や生き物の知識を発揮しながら、この体験の期間を楽しんだ。そして、このたった一週間の体験で、これまでどうしても朝起きることができなかった彼は、本来の生活リズムを取り戻し、体力を徐々に回復していった。

2学期となり、授業やさまざまな行事のある、通常の学校生活が始まった。彼は、以前の学校でつらい思いをした、体育祭といったような、集団行動を強制される学校行事があることに対しては、やはり不安だったようだ。しかし、その学校行事においても、彼のいいところを理解すれば、うまく引き出すことも、彼の成長につなげることもできるのだ。これまでの集団行動の中で、自分のペースが全く守られないことに対して、彼は苦しさを感じてきた。また、こちらから尋ねていくと、どんなことにも誠実にそして積極的に答えてくれるのだが、物静かで声高に自己主張をするタイプではないため、集団の中では「もう少し自分のペースを守ってほしい」と主張することがうまくできず、また、積極性を発

揮って存在を認められるということも難しかった。しかし、きめ細やかに接していると、ユニークで能力も高く幅広い知識を持ち、また自ら決めたことはしっかりとやり遂げる、といった責任感も持ち合わせている、といった彼の長所がよくわかる。そこで、文化祭では、「S君は何かやりたいことはないか？」と個人的に声をかけるところまでは教師が引っ張り、その後は彼の自主性に任せる、というスタンスを取った。このように、彼の特性が生かされると、彼は自らみんなのペースも大事にしたい、合わせることも楽しいことだ、と感じるようになった。そして、文化祭では、個人的にやりたいと申し出た占いブースも繁盛し、また合唱メンバーとして、またグループ発表でもおおいに活躍をした。達成感、充実感とともに、集団への所属感とそこで喜びを経験できたのではないかな。

その他、ご両親が最初に心配していた、寮での集団生活にも、彼は徐々に馴染んでいった。最初は個室だったが、学校生活に馴染むペースや、どんな相手となら無理をせずとも相部屋になれるだろうか、というところをよく検討したうえで、共同生活へと導いていった。可能ならば、やはり、共同生活というのはとても大きな人間的な成長の機会となるようだ。夜、部屋の仲間と、これまで誰にも語ることでできなかった、以前の学校で苦しかったこと、悩んでいたこと、また今も悩んでいることなどを、話し合えたことはとてもありがたかった、と彼は語ってくれた。

11月の文化祭の後、S君のお母さんより、以下のようなメールをいただいた。少し長くなるが、不登校の子どもを持った親御さん達の思いを、あまねく、代弁して下さっているのだから、全掲をさせていただく。子どもが元気になるためだったら、どんな些細なことにも尽力をし、しかしながら必ずともうまくいくとは限らず、行き詰ってしまったときの絶望的なまでの不安、そして、希望が見えた時のここからの安堵を感じ取っていただければ、と思う。

北浦先生、お世話になっております。Sの母です。

文化祭も無事済んで、ほっとしておられることでしょうか。私達も一家で見に行きましたが立派な文化祭で、いきいきと活動している息子と他の生徒さん方を見て、本当にうれしく、4ヶ月前がうそのようだと、いろいろ思い返しておりました。

Sは小学校の頃はとても元気で、活発というほどではないけれど、川や泳ぐことが大好きで、友達と外で楽しく遊んでました。本をよく読み、自分の考えを整理して話すことが得意で、授業でもよく発表する方でした。転勤族なので3年ごとに引っ越していましたが、「僕、どこでもけっこうやって行けると思う」というぐらい人付き合いは好きな子でした。

中2の春大阪に引っ越してきて、新しい中学に最初は元気に通っていたのですが、夏前ごろからだんだん元気がなくなっていました。意見が違うといちいちからまれる、回り持ちのはずの当番をいつも押し付けられる、些細な事で突然冷たい態度を取られるというような事があって、学校嫌だと言うようになりました。それでも休むとは言わなかったのですが、体の方に症状が出ました。最初は朝起きられないという症状から始まりました。遅刻ギリギリまでどうしても体が起こせない、血圧が上がらなくてフラフラで、動悸も激しい状態で、ドリンク剤を飲んで「救心」も飲んでそれでも体引きずるようにして学校に行っていました。帰ってからもいつもしんどいというようになりました。次第に朝10時ごろまで起きられなくなりました。それでも起きてから遅刻してでも学校に行っていました。とても辛そうだったのですが、主人の「安易に休ませたら行けなくなる」と言う考えから、「親は尻を叩くのが役目だ」と思い無理に学校に追いやっていました。その後夏休み明け、体育祭の練習が始まり、そのなかでいろいろ言われたようで、あるとき「僕もう無理」と言いました。学校に行っても教室に入ることが怖くてできないようになり、泣きながら帰ってくるのが何日かあったあと、結局学校に行けなくなりました。

私ども夫婦は当初は、今のクラス今の学校に馴染めないだけとっていました。しばらく学校休んでも、学年が変われば大丈夫かもしれない、中学校がだめでも高校に行けば大丈夫かもしれない、とっていました。ただ、塾の夏期講習を受けた時も「人に見られるのが怖い」といって後半は行けなくなったので、もうクラスや学校だけの問題じゃないという事に気づくべきでした。

心療内科にもかかりましたが最初に行った病院はビタミン剤をくれるだけでろくに話も聞いてくれないようなところでした。あちこち探して、思春期外来のある小児科にかかりました。そこでやっと経過や本人の話をきいてもらい、「緊張と不安が強いための不眠・自律神経失調」と診断されました。一時的に緊張を和らげる薬と睡眠薬を使って動けるようにしてみましようといわれ服薬しましたが、効果なく、先生の指示でやめました。あとで、知った事ですが、効果が出ないのにずるずる投薬を続けて薬依存にになってしまう病院もよくあるそうで、あのとき投薬を中止してくださった先生には感謝しています。「心のエネルギーが低下しているのでしばらく休ませましょう。エネルギーを取り戻せば、自分から動き出すようになります。」と言われ、待つことにしました。

家にばかりいては体力が落ちてしまうから、と毎日散歩にいき、不登校の子供達を援助する、市の通所施設にも相談して、週1回（のちに週2回）通う事にしました。本当は毎日通いたかったのですが、週一日確実に来られるようになってから増やしましょうという事で週1日になりました。

自律神経失調にはヨガがいいと聞いて、心療内科クリニック内のヨガの先生（兼心理療法士）のトレーニングとカウンセリングを月に2回ずつぐらい受けることにしました。これであとは心のエネルギーが戻ってくれればと思いました。（ちなみに我が家にはDSやWiiのようなゲーム機はなく、ネットも親が見ているときだけ使うことになっています。なので、そういうもののせいで生活リズムが乱れたというのではないのです。）

それでも次第に元気も体力も低下していきました。市の施設が居場所になればと思ったのですが、週1回ではなかなか親しい関係が作れず、ま達ようどその日に体調が悪くて休むこともたびたびあり、そうすると丸々2週間施設に行かないことになったりしてなかなかうまくいきませんでした。元気がある日は元気がある日で「どこにも行くところが無い」とさびしく思っているようでした。そんな状態のまま冬が過ぎ春も過ぎ、6月にはまた体調がガクッと悪くなり、市の施設にも通えない日が続きました。散歩にもいけない。体が動くのは夕方だけ。一日のうち4時間ぐらいしか体を起こしてられない日もありました。起きたい・動きたい気持ちがあるのに動けない、という事で本人もすごく落ち込み、どうしてできないんだろう、ずっとこのままだったら僕はどうしたらいいんだろうと悲観するようになりました。施設では毎月末「来月の目標」を書くのですが5月までは「施設に通う日を増やす」などと書いていたのに6月には何も目標を書けなくなっていました。

親の方は、最初は、同い年の子供達が勉強に友達つきあいにいろんな体験をして成長していく時期にSだけが家に籠っていることで、このままでは社会にでていけなくなるのではと不安を感じるくらいでした。でも毎日毎日「しんどい・つらい・だるい・起きられない」と苦しむ子供を見ていると一緒に気持ちが暗くなってしまう、少しでも体調がいい日はもうそれだけでああよかったという気になってしまって、あまりに気持ちが振り回されすぎて、もうこのさきどうしたらと深く考える事も出来ませんでした。しかし6月ごろSの体調が悪化すると、このさきいったいどうなってしまうのだろう、社会人としてどころかそもそも生き物として生きていけるのだろうか。このまま寝たきりになってしまうのでは、と暗澹たる気持ちでした。あんなに元気な子だったのに、と思うと余計つらかったです。クラスでうまくいかなかったという事が結果的にこんなにも重い症状を引き起こすとは。人と付き合えないという事がこんなにも子供にダメージを与えるとは昔は思ってもみませんでした。

小児科の先生はエネルギーが回復するまで待ちましようと言ってくれたけど、待っていても「しんどいから休んでいる→体力が低下→ますますしんどくなる、気持ちも滅入る」の悪循環で、このままでは抜け出せないと思いました。

心療内科のヨガの先生（兼心理療法士）からも「このまま家に居ては動かない。環境を

変える位の思い切ったことをしないと」いわれ、どこかこのような状態の子供でも安心して居られるところがないかと探して西濃学園に辿り着きました。

最初に体験入学に行った日、暑い日で、Sは移動ですっかり気分が悪くなってしまい学園に着くや否や長椅子に倒れこみ何時間か動けなくなった事を今でも覚えています。それでも怒られたり、早く動きなさいと言われたりしなかったことで本人もほっとしたと思います。その後は本当にびっくりするくらい学園になじんで、なぜか「学園ではよく眠れる」などと言って、体調も整い体力もずいぶんついてきました。文化祭で同級生と一緒に発表や制作をする様子を見ると、元の中学校で感じるこののできなかった「人と一緒にいて楽しい」感じや「自信」を、ここでは感じる事ができているのだと本当に嬉しくなりました。この子が元気になるには、薬よりもこれが必要だったんだなあと改めて思いました。

今から思うと、本当にこの夏が大きな分かれ道でした。もし学園に来ないまま、ずっとうちでうつうつと過ごしていたら圭太は今頃はもっと体力も落ちて、心も落ち込んで、きつと寝たきりのようになっていたと思います。そうしたら親もずっと将来にわたっても苦しい思いをし続けただろうと思うと、本当に分かれ道で明るい方に引っ張っていただいたと感謝しています。

学園の他の生徒さんを見ていても、みんなごく普通の子供達で、こんな普通の子供達なのに、うちの子と同じように、学校に行けなくなって苦しんで、社会からはじきだされる瀬戸際だったのかと思うと、学園があって本当に良かったと心から思います。



丁寧な共感を

Yさんは、祖母と母親に連れられて、新潟から見学に来た。特に祖母が、学園をいたく気に入って、すぐさま1週間の体験をする運びとなった。1週間の体験を何の問題もなくすませると、彼女はすんなりと転入を決めた。

Yさんが不登校になったのは、中学1年生の3学期、突然ぶつんと糸が切れたように学校へ行けなくなってしまった。祖母や母親は、彼女の中学は、全国のモデル校となるような斬新な建築の学校で、そのことが馴染めなかったのだと言い、彼女もうなづく。不登校になってからは生活リズムが乱れてしまった。そこで、祖父母と住み、生活リズムを立て直す。また、少しずつ独学で学習の遅れを取り戻しながら生活をするようになって、ずいぶん落ち着いたので、進学に向けて動ける最後のチャンスだと、祖母と母が彼女の背中を押したのだった。

あまりにもすんなりとスムーズに入学や転入となる場合は、逆に、そこにこそ、その子の難しさがあることが多い。彼女の場合も、そうだった。

1週間の体験では、「学園生活は過ごしやすいし、女の子達も優しい。食事、睡眠も何も困っていないし、私は、どんな場所でもけっこう眠れる方なんだ」と笑って答えていた。また、「中3だから、受験、受験と必死なのかなと思ったけど、ゆったりとした授業で、ついていけるという感触がある、頑張っていきたい」と前向きな表情で語っていた。

そうやって語られたことをそのまま受け取り、やっていけそうだとすることで転入の運びとなった。しかし、転入の手続きもみな済ませ、西濃学園で生活を始めた2日後に、彼女が「帰りたい」と訴えていることを知る。直接、彼女から言われたのではなく、彼女が母親にメールをし、母親からの相談という形で学園側は知ったのだった。彼女の授業や寮での生活の様子を見ている限りでは、学園側は彼女が「帰りたい」と思っているとは気づかず、いや、気づけずにいた。

ゆっくりと彼女の話を知ると、本当は、体験に来たときからここに来るんだったら元の学校に戻りたいと思っていたこと、祖母や母はもとの学校に良い感情を持っていないようだが、自分自身はそんなに否定的な思いは持っていないこと、ただ祖母や母親に悪いと思って言えなかったことを、泣きじゃくりながら必死で言葉にするのだった。そして、誰にも話せなかったが、学校に行けなくなったのは、「自信がない」という漠然とした理由だったが、いろんな病院で理由を尋ねられても、そんな理由でと言われるんじゃないかと思って言えないでいたら、学校が落ち着かないとか、そういう理由になってしまった、いじめられたわけでも、もとの学校が嫌なわけでもないのに、としゃくりあげながら語る。

語られた内容に対してはもちろんだが、こんなことを語ってもいいのだろうか、という

人や世界に抱き続けている不安や不信感、また、ずっと語ることができなかった苦しさ、語れなかったことで余計自分を追い込んでしまったことへの自己嫌悪、そして、とうとう語ってしまったが、これからどうなるのだろう、語ってしまったことでさらに自分は追い込まれるのではないかという恐怖に対して、共感を持って彼女の話聞いた。

そして、彼女の口から、「もう元の学校に戻ることにしか考えられない」という言葉が出る。しかし、ここでも、彼女が語れることは、本当に語りたことの一部なのかもしれない、と、語られないことも含めて聞き、共感をするという姿勢で対応をした。

勇気を出して自分の思いを口にしてくれたことをねぎらい、転校の手続きを取ってしまったことは気にしないでいいこと、Yさんが頑張れるように応援をしたいと思っていることを、まず伝えた。そのうえで、だけど、Yさん自身もどこかで、元の学校へ戻っても学校へ行ける自信はまだなくて、戻ったら戻ったで不安だと思っているのではないかと、もとの学校に戻りたい一心であるために、語られてはいないが、抱えていて当然の気持ちに対して共感を伝えた。そして、元の学校へ戻っても、思うようにやれるように、ここでできることを取り戻したり伸ばして行って、自信がいたら戻るようにしてみてもどうか、そのときはいつでも戻れるように計らいをする、と今後の方針を提案すると落ち着きを取り戻し、安堵を見せた。

「共感的に話を聞く」というのは、関わりの中でももっとも重要とされる場所だが、ただ語られることに焦点を当てているだけでは、本当の共感には、足りないのではないかと。もちろん、主観的に語られることであっても、その主観に思いを寄せながら聞くことは大切だ。その上で、その主観を持つにいたった背景や、そう語らざるを得ないその人の歴史性も含めて理解しながら聞く、そして語られたことと同じくらいの重みで、語ることができないことも聞く、あるいは語りたくないことも理解しながらこころの声として聞く、それが西濃学園の共感の姿勢である。

そうやって彼女の話聞いていくことで、両親の離婚をはじめ自分の生い立ちについて、また、離婚した父親に似ていると母親から責められたり、虐待に近いような暴力を受けてきたことなど、ひそかに悩んできたことを話せるようになってきている。

結局、Yさんは、西濃学園にとどまり、ここで学ぶことを選択した。彼女の振り返りからも、もう一度やり直したい、と思ったときにその気持ちを支えてくれる学校があることで、助かる子ども達がいることをわかっていただけ嬉しく思う。

西濃学園に来る前、私は約9ヶ月もっていました。高校なんてどこかしら必ず入れるんだから、学校とか勉強はもういいや、とあきらめていました。いまさら元の学校に戻ったっておそい。勉強は手に付けにくいせに、それでも勉強が気になって焦っていて、何を

自分がすればいいのかわからない状態でした。明日、どうやって生きようかな。なんて考えていました。

夏のお盆のころに、母が知りあいから不登校の子がいく学校があることを聞いて、市場ですぐに調べて見学の電話をかけました。その時の気持ちはよく覚えてないけど、自分から調べたので、見てみたいと思ったんだと思います。

体験の初日は、慣れないところでさみしくて泣いてしまったけど、人数が少なくってリラックスする時間があって、好印象でした。正直、前の学校に戻ることは自分の気もち的にも無理だなあと考えたし、どうなってもいいや、と思ったのでここに来ました。

入って一週間は、ものすごく帰りたかったです。卒業証書も自分が3年間その学校にいたんだ、っていう証がほしくて、今すぐにでも前の学校へ自宅から通いたい、と思いました。待ってけている友達だっているし、自分にふんばる力がなかったからここまでズルズルとおかしな生活が続いてしまったんだと反省しました。それで、学園長先生に戻してくださいなんてお願いして、本当にすみませんでした。日にちが経っていくにつれて生活に慣れてきたし、友達とも会話がはずむようになってきて、苦痛じゃなくなってきました。形にはこだわらず、今を大切に生きようと考えました。勉強もやる気ゼロでしたが、学校という場にいる限り、やらなくてはならないことだし、周りに人がいるとやはり刺激されて、手がうごく気がします。1年分のおくれをとりもどすことなんてできないと思っていたけど、一生懸命やっていたら、足りない部分があっても追いつくことができました。勉強はわかると楽しいです。

あと、ここへきて思ったのは、同じ年の子と同じリズムで生活していくことがどれだけ大事なのかということです。6月から4ヶ月間、祖父母の家で暮らしていました。お年寄りと同じリズムで生活していると、会話も全くちがうし、興味をもつものも変わってくると感じました。だから最初はこの子達の話の内容とか幼く聞こえたと言ったら失礼だけど、おもしろくないな—と思いました。でも、それってすごく悲しいことだと気づきました。本来なら楽しくおしゃべりしているはずなのに、それができない自分が情けなく感じました。人との関わりをたっていたことがよくないことだったんだ。と思いました。学校で同じ年ごろの子達と協力したり競争しあったりしていくことで、社会性が養われることがどんなに大切なかがわかりました。

それと、不登校になってから昼夜逆転していた時期があって夜中の暴食がすごく太ったりしていました。おばあちゃんの家について朝きちんとおきれるようになったけど、お米がどうしても食べれなくなりました。一口食べたら必ず脂肪になると思いこんでました。でもここへ来て3食決められた時間に食事をとって、勉強や運動も定期的にして、少しずつ食べれるようになりました。本当は一人分、完食したいけど、まだ気持ちが沈んでしまうことがあります。高校に入るまでにはちゃんと治したいです。

目標も見つかったし、たくさんの人に出会えて、ここへ来てよかったです。

V. 平成26年度教育活動報告

続いて、今年度の教育活動について報告をする。

1. 自己イメージを得つつ、現実とかかわることができるようになっていったA君

入学時に、図3の人物画を描いた生徒である。A君は、岐阜の山間部に生まれ育つ。高校から西濃学園に入学したが、家庭が遠方だったため、3年間寮生活をした。基本的に、おとなしく、また素直で真面目な生徒である。不真面目な態度や反抗的なことは一切ない生徒だった。

彼が、自覚していて、改善したいと思っていた問題は、まず、朝が起きられないことだった。不登校になった中学2年生の頃から昼夜逆転になり、朝起きることができなくなった。また、日常生活がスムーズにおくれなくなるくらい、トイレが長いこと。これも、中学2年の頃からの症状で、2時間以上入っていることもある。その他、大勢の中に入っていけない、自分から話しかけることができない、言いたいことをうまく言葉にできない、とコミュニケーションが苦手だという自覚もあった。

しかし、学園は、上記の問題以上に、まず、母親との連絡のため携帯電話を手放せないことを問題だと感じていた。そして、高校3年の進路の選択の際に特に顕著になったのだが、進路について、いつまでも他人事のように、彼からは焦りや危機感を全く感じる事ができなかった。彼の現実感のなさ、また現実とかかわる力のなさに唖然とした。

まず、家族構成だが、父、母、姉、妹のほか、近年は、叔父や叔母（父の弟や妹）とも一緒に暮らしていた。彼は高校3年生になるまで、家族について話すとき、父親のことを「おとう」、母親のことを「おかあ」「かあ」と呼び、外と内の使い分けができなかった。というより、外と内が未分化だった。

また、父親や母親がどこで、何をして働いているのかを知らず、妹の学年も知らず、叔父や叔母がどのような経緯で一緒に暮らすようになったかも知らなかった。現実の基盤の一つをつくる、客観的な事実について彼はあまりにも知らなさ過ぎた。

客観的な事実の水準で現実を説明をしたり、共有をする、ということが苦手なのは、彼だけでなく、母親にも共通していた。家族について、また、A君の成育歴について、母親に調査書を書いてもらったのだが、質問の多くに「普通」あるいは「？」と書かれてあり、彼について、また彼を取り巻く環境について、具体的に描くことが難しく、曖昧模糊としていた。

客観的な事実の情報も彼の現実を構成しきれていなかったが、内的なイメージにおいても、彼にとって、つかみどころがない家族だった。父親については、「優しくて面白くて

時々怖い」と並行的にその印象が語られた。iPodを買ってくれたからやさしい、電話で自分の友人と話しているときに「あちょー」と言っていたから面白い、お酒を飲むと気が大きくなり大声をだすことがあり怖い、とそれぞれのイメージが交わらず、断片的だった。母親については、ちょっかいをだすとノリで返してくれるから、「面白い」と言う。また、彼の母親への態度は、彼が学校で見せることのない態度だった。母親の肩に腕を置いて、何を話すでもないが、「なあなあ」と話しかける。社会的な言葉以前の、感覚的な水準の言葉のやりとりで成り立っている家族のように感じた。

生育歴については、「人見知りがなかったこと」「幼児期に病気はなかったが、けがが多かったこと」以外ははっきりせず、不登校となる中学2年生までは、「普通」という言葉で括られて、表されていた。不登校のきっかけは、いじめだった。それまでは順調に登校できていたが、中学2年生になり、テニス部の先輩から言われた一言から段々と部活、学校に行けなくなった。部活の休憩時間中に、彼以外の部員がカードゲームで遊んでいるのを見に行ったところ、先輩から「何見とんのや!」と言われた。また腹痛が治まらず、トイレが長くなり、医師からは、「他人より腸が長い、ストレスからくるもの」と言われ、過敏性腸症候群と診断される。親は、朝起きられなかった彼を、遅くからでも学校へ送っていた。また、中学校の先生は家庭訪問などをしてくれた。しかし、登校を巡る状況が良くなることはなく、進学に際しては、中学校の先生が、「彼が学校を辞めてしまうことがないように」という条件を優先して、西濃学園を選択肢の一つとして押してくれたようだった。朝起きることができず、トイレに長くこもってしまうため、通学で高校生活をつづけることは難しい、と判断し、寮で生活のリズムをつけることができる高校を勧められたようだった。

A君は、入学の直前に家族旅行をし、家族旅行の最後に学園に来て、入学をした。特に彼と母親が離れることを悲しみ、入学説明会では2人で泣いていた。また、彼は、学園の生活に馴染むのにとても時間がかかった。本人も後に振り返る。「1年のときのことで、一番覚えているのは、家に帰りたかったこと。家に帰ると、学園の寮に戻ってくるのが嫌だった。入学式の後、母が帰っていったら、『もうあかん』と思った。知っている子もないし不安というか、恐怖で布団の中に包まっていた。1か月は、ずっと自分の部屋から出なかった。携帯ゲームか、談話室にこそと取りに行った漫画本を、何回も何回も読んでいた。でも、少しずつ、談話室に漫画本を取りに行けるようになった。ただ、自分から人に話しかけることはできなかった。今でも、知らない人に自分から話しかけることができない。『なにこいつ』とか、思われるんじゃないか。嫌な顔をされるんじゃないか、と思う」。

また、週末の帰省に関しても、高校1年時は、彼だけ特別に早めに帰宅して、遅く帰園をする、という日程で行い、何とか寮生活を継続できていた。前述したが、母親との連絡のための携帯電話が手元にないと不安でたまらなくなるということから、本来ならば就寝

時間になると携帯電話は学園に預けなければならない規定なのだが、彼だけは自室で持っていた。携帯電話は、まるで、母親とつながるへその緒のようだった。身だしなみも全く他者を意識したものではなく、髪も髭も伸ばしっぱなしで、浮浪者のようだった。食事を食堂でみなで取ることや、お風呂に入るためにみなで温泉に行くことはできたが、他人と目を合わすことはできず、いつもうつむいて、自分の殻に閉じこもっていた。

高校1年時の夏休みに、はじめての夏山登山に参加した。「言われたから参加する」という感じだったが参加できた。中コースの蝶ヶ岳のコースにチャレンジするが、あっさりとリタイアとなってしまった。体力もなかったが、精神的に頑張ろうという気概がほとんど見られなかった印象である。

高校1年時の2学期から徐々に帰宅の回数を減らしていった。また、このころから、転入をしてきた先輩と親しくなり、カードゲームの同好会に入る。カードゲームを通して、先輩や同級生と友達関係ができていった。

高校2年となり、ほかの生徒と同じような帰宅のペースで過ごすことができるようになる。この頃を振り返って、A君は、「帰省から寮に帰るのがつらかった。家族と離れるのがつらかった。しかし、1年が終わるころには、だんだん薄れてきた。学園でのコミュニケーションができるようになったから」と話す。

1年をかけて、学園に慣れることができる部分もあったが、起床ができないこと、トイレの時間が長いこと、授業中の態度の問題は変わらず続いていた。

A君は朝起きることが非常に苦手であり、毎朝7時半の起床、食事にはなかなか起きてくることができなかった。入学当初から夜が寝付けない、また、夜中にトイレに入ると長時間出られなくなってしまうことが頻繁にあった。少しずつでも改善を試みようと、担任との話し合いの中で、まず、週に2～3回は何とか起きるように呼びかけた。担任が宿直明けの朝と特定の職員が起こす時はほぼ起きようだったが、それ以外の職員が起こしても、ほとんど起きることができなかった。

トイレの問題は、頻度や時間に関して、家でも学園でも変わらなかった。自宅で長時間トイレにいと、母親に「いつまで入ってるの!」とよく言われる。学園では、「大丈夫か」と声をかけるくらいで、トイレから出ることを強く促すことはなかった。トイレへはほぼ毎日こもり、深夜に45分～1時間、起床後30分～2時間くらいこもっていた。このことに対して彼は、特に辛いと感じておらず、「生活の一部」と言っていた。そして、このように、起床とトイレの問題はあったが、毎朝、8時半ごろに出発する長瀬校舎(高校の校舎)行きのバスに乗り遅れることはなかった。しかし、長瀬校舎に着くと、必ず、すぐにトイレに入ってしまう、週に1～2回のペースで、長いときはお昼頃までこもることがあった。彼にとってのトイレは、母親の胎内のような、安心して何も考えずにひきこもってられる空間のようだった。

授業については、私語をして授業を妨害するなど、教師を困らせる行動は一切ないが、

「消しゴムのかすをこねて、ひたすら練り消しを作る」という自分の世界にこもってしまうことがよくあった。学力、理解力は高くなく、高校2年時に、実施したWISCでは、全検査IQは85（言語性IQ82、動作性IQ92、言語理解85、知覚統合97、注意記憶76、処理速度83）だった。トイレと同様、こねている練り消しは、母親の乳房の代わりに、母親と一体感を感じられる幻想の世界にこもってしまい、社会に出ていくことができないこと、それが、彼の問題のもっとも根幹にあるようだった。

高校2年時も、夏山に登った。しかし、登頂しても、山や山に残る雪など、自然を見ることもなく、常に寮でしているようにゲームをするなど、彼にとって夏山登山が、意味があったのだろうか、と周囲は心配になった。普段は小さめの声だが、ゲームをしている時は周りを気にせずに大声で叫んでいることもあった。また、運動神経は悪くはないが体力はなく、運動より、ゲームやプラモデルが好きである。

ゲームは、彼の生活には切り離せないもので、ゲームと現実の境界もあやふやになるほどに、ゲームの世界に、自分を支えてもらっていたのかもしれない。彼は、夢を頻繁に見るそうなのだが、一番好きなMinecraftというゲームの世界で冒険をしている夢をよく見ていた。Minecraftとは、資源を集めて自分の好きなように世界を構築していくゲームだが、自分が作った町や、洞くつの中を探索したり、冒険をしている夢である。彼の象徴機能のなさとともに、自分の作った世界の中でなら、主体的に動くことができることを教えてくれる夢である。

高校3年となると、A君も、いよいよ進路の問題に向き合わなければならなくなった。彼と話をすると、本当に一生懸命に、真面目に話す雰囲気は伝わってくるのだが、まるで話の内容が深まらないことに、担任をはじめ周囲は不安を深刻に感じはじめた。担任と、進路について、こんな会話をしている。担任<進路についてだけど、卒業後は何か考えている？>A君「…家を継ぐというか…」担任<あれ、A君の家って自営とかしてた？確かお父さん会社員じゃなかった？>A君「おじいちゃんがちょっとやって…その手伝い如果能ければなって。」担任<おじいちゃん何をやっているの？>A君「野菜を作っています。」担任<おじいちゃんはそれで商売をしているの？>A君「いえ、趣味で作ってます。」彼の世界はすべて家族で完結している世界なのではないか、家族の外の社会や経済のことがまるでわかっていないのではないかと担任は唖然とし、学園の外に出ていくことができるのだろうか、と担任の焦りだけが募っていった。

また、就職のほか、彼の進路の希望の一つは専門学校（代々木アニメーション学院）を挙げていた。しかし、多少なりとも興味があり、地元の友達が行くから、という意欲としては薄いものだった。他の似たような専門学校を調べたこともなく、当の代々木アニメーション学院についてもどんな科があるのか、具体的には知らない、と話す。担任が資料を渡しても見ておらず、ゲームと漫画ばかりで、将来についての危機感も、現在に生きているという現実感の手ごたえも、全く感じられないような生活をおくっているように思えた。

そこで、ケースカンファレンスで話し合い、ゲームと同じようにはいかないものの、彼が現実でも動くことができるように、「これが自分の世界だ」と感じることで、実感を持てる現実のイメージを形づくること、同時に、そこで動いている自分のイメージを確かなものにしていくことが不可欠なのではないか、と方向性を定めた。その過程で、母親と一体化して引きこもってしまう世界と距離をつくることも必要である、と考えられたが、彼は携帯電話を手放すことはどうしても受け入れることができなかった。そこで、まずは、母親のカプセルから出ても大丈夫だと感じられるように、他者との関係を築くことを意識しながら、担任を中心とした関わりを増やし、継続をしていった。

担任は、就職や進学の際、面接などで聞かれる可能性もあるし、また、彼の現実感の足場を固めることができるように、「どうして西濃学園へ来たのか」「ここでどういう体験をしてきたのか」といった事実的なことから、彼の過去と現在を整理したり、つなぐ話題を中心に聞いていった。うまく話せない彼のペースに寄り添い続けるには、あきらめない気持ちが必要だった。しかし、話を続けるうちに、中学2年生の時、先輩からいじめられたことについて話しながら、「なんで僕だけ」とそのときの怒りや、「一人で、ずっと壁に向かってサーブの練習をしていて、何をやっているんだろうと思った」と悲しみのようなものが表現されるようになっていった。

そして、担任が<入学したときは、お母さんと2人で泣いていたなあ。それを思うと、随分とたくましくなったと思うし、自分でもそう感じないか><一生懸命なところは好感が持てるよ><謙虚なところもいいよ>と丁寧でこまめなフィードバックをすると、それに対して「はいっ」と嬉しそうに答えるようになっていった。

さらに、A君が自己イメージを明確にしたり、他者との間で齟齬の少ない自己イメージを作っていく際に役に立ったのが、「ボケ役」というキャラクターだった。これは、高校2年の終わりに、お別れ会で同級生とコントをやったときに担当した役だった。この「ボケ役」を本人も気に入り、周りも面白がりながら、好意を持って受け入れた。授業や生活の中でも、一歩間違うと、変な子、幼稚っぽい子、馬鹿な子、と思われてもおかしくなかった。しかし、その一方で、言われたことはきちんとやる子、反抗的な言動もなくまじめで人が嫌がるような面倒なことも嫌な顔をしない、といったところは、他の生徒からも認められていた。そんな彼には、「ボケ」というキャラクターが落としどころとなりやすかったのかもしれない。

また、日々の活動の中でも、「作ること」を勧めた。先輩達が卒業していったことで、メンバーの変化や、その意向から、カードゲーム同好会は模型部に変ったのだが、そこでプラモデルを作るようになった。彼は主に主人公機を好んでつくり、徐々に難しいものをつくるようになっていった。また、この模型部の仲間関係を中心に、同年代の友達や先輩達と、計画を立ててキャンプに行くなど、同性・同世代の親密な人間関係ができていっ

た。

そして、進路の選択に関しては「進学」も不可能ではない時代だが、あやふやな自分のまま、さらにあやふやな将来の見えない進路を選択させることは、A君の自立や後々の社会性が育っていくにはマイナスなのではないか、と担任は考える。担任が、＜声優や漫画は、休日とかに、趣味でやっていけばいいんじゃないかな＞と伝えると、彼ははっとしたように「そうですね」と言って、就職に傾き出した。

ちょうど同時期に、職場体験で、福祉に理解のある喫茶店で3日間、オーダーをとったり、料理を運んだり、仕出し弁当を施設に運んだりした。そこの担当者からも、「言ったことはちゃんとやる」と評価を貰い、＜コツコツとやっていく方がA君には向いているかもしれないね＞と担任がフィードバックをすると、「自分もそう思います」と言って、就職へと舵を切った。本当は家族も、進学より就職の方が望ましい、と思っていたことが後にわかる。しかし、「Aが好いように」と言うだけで、家族の希望を伝えたり、選択や決断をして、彼を導くことのできる家族ではなかった。

夏休みには、最後の夏山登山があった。彼は、高校1年の時にあっさりとリタイアした蝶ヶ岳のコースに自ら挑戦を申し出て、達成をした。最後の夏山を振り返って、「高1のときは、いろいろな体験をさせられて、面倒くさいと思って、ずーっとしぶしぶだった。夏山登山も、『マジで登らないといけないの?』と思った。それが、『がんばってみよっかなー』と少しずつ思うようになった。高1のときは、蝶ヶ岳でリタイア。荷物も重くて、体も限界だったけど、メンタルで、もういいやーと思っていた。高3のときは、達成感があった。しんどさは、もちろん1年の時と同じくらいしんどかったけど、『やるとしたらやれるだけはやろう』『やっといた方がいい』と思った。『自分で決めた目標まではやろう』と、いろんなところで思うようになったかもしれない。昔の自分は、何でも中途半端だった。しかし、寮生活をする中で、中途半端はみんなに迷惑をかけるとわかった」「夏山に登った頃は、ちょうど、一番、迷っていたとき。アニメの専門学校と、就職で迷っていた。しかし、専門学校に行っても、仕事はない、と先生からもくぎを刺された。近くのゲンキー(ディスカウントドラッグストア)くらいでバイトでもいいかな、と思う気持ちも結構あった。しかし、夏山に行ったときに、そこで会社に提出する履歴書を書いたりしながら、『やるだけはやってみよう』と思っていた」とA君は語った。

高校3年の2学期に入ると、会社訪問、面接と、就職活動が山場に入り、彼は2社のうち1社の内定をもらうことができた。就職が決まってからは、「就活は、2年のときから先輩が苦勞していたのを見ていた。先輩からは、『早く決めといた方がいい』とも言われたけど、結構迷っていた。先輩の就活や仕事の話は身にしみた」と話すようになった。卒業後の進路について、彼がこのように現実感を持って受け止めていたとは、周りにはどうしても思えなかったのが、驚いたことだったが、担任の言葉や考え方を「資源」として、

彼が自分の現実の世界を構築、あるいは再構築してきた様子がうかがわれた。

高校3年の最後の西濃祭の創作劇でも、彼は「ポケキャラ」を選んで演じた。役の中でも、また実際にも「ちょっとポケ」と思われていることについて、「人前に立って話をするなんて考えられないことだったけど、『ポケ』という役だったら、やれた。実際にそういうところもあるし、それでやりやすいんだけど、そうじゃないところもありますよ」「同級生の子にいじめられすぎると、さすがに怒りたくなる時もあるし」と語る。「ポケキャラ」は、与えられて、また落とすどころとして有用だったキャラクターではあったが、そのイメージに収まらない自分ももちろんあり、さらに自分らしくやれそうな自己イメージを求め始めているのかもしれない。

また、A君は、就活の際に、会社の人達からの印象が良くなるようにと、担任から、「寮長」という架空の役を与えられていた。それ以来、寮を過ごしやすくするための規律について考えるようになったり、自己イメージをつくる際にも取り入れていく。「今の寮生活で、中学生が規律を守れていない様子を見ていると、自分が高校1年生の時の先輩達はしっかりしていたなあと思う。その時のNさんやSさんのように一目置かれる先輩になりたいかったけどなれなかった。だからといって、後輩が、『先輩、先輩』といてなついてくる先輩にもなれなかった」としみじみ話す。＜そんな自分になりたいなあって思うこともあったんやね。でも、聞くところによると、中学生が騒いでいて、高2のK君が「うるさいっ」と怒鳴っても中学生は「またか」って聞こうともしないけど、A君が「静かにした方がいいんじゃないかな」ってぼそつと言うと、しっかりと聞いていて、「そうですよね」と中学生は言うことを聞いている、そういう意味でA君は怖がられていないけど一目置かれていると聞いたことがあるよ＞と伝えると、「えっ、そうですか。そんな風に思われていたって自分ではわからなかった」と嬉しそうだった。退寮の時は、後輩から「先輩、寮を出ていくんですね。さみしくなります」と言われてうれしそうだった。

A君にとって、3年間を過ごした寮生活の重みは、確かに大きく、「ここで3年間やりましたから」と何かある度に言葉にしていた。「寮生活を始めて、親に頼りっぱなしだったと思った。洗濯とか、何でも。最初の3ヶ月は、洗濯物を全部持って帰宅していた。しかし、みんなが洗っているのを見て、いい加減自分で洗わないと、と思った。親に頼りっぱなしではいけないとも思うようになった」とも語っていた。

トイレの時間も短くなり、午前中ずっとこもっていることはほとんどなくなった。トイレについては、担任との面接の中で話し合われたことの一つで、「自分でコントロールしよう」という声掛けで進めた。「何時までに終わらせてみよう」「朝にならないように夜だけでおさめてみたらどうだろう」と具体的な指示とともに、「自分で自分をコントロールしたからできたんだよ」というフィードバックを丁寧に行っていた。

その他、就職が決まってからは、体力が必要だと改めて思ったようで、タイヤを背負って走るなど、体力づくりに自ら取り組みだしたことは、彼が成長したところだと思う。「高校1年のときは、寮に入ってみてから、不安なことが出てきたけど、入ることが決まっている今から、準備しようと思って」と、見通して行動する、ということが初めてできた。

しかし、もちろん、まだまだ不安なところもたくさん残っている。家族の関係性においては変化がなかったこと、また、彼の自己イメージや現実という感覚も、ずいぶん担任が導き、支え、ともに形づくったものだった。それでも、卒業を間近にしたころには図6の人物画を描く。

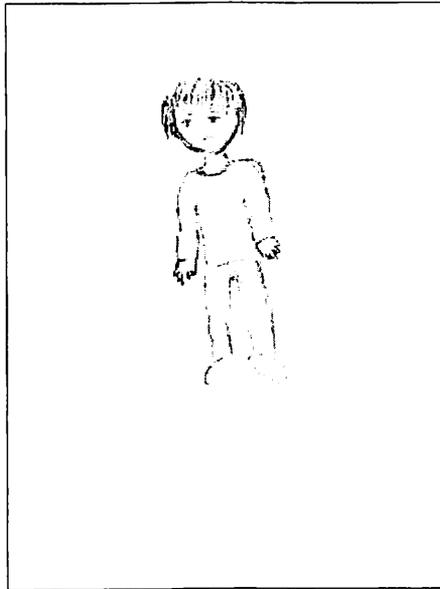


図6 A君の卒業前の人物画

まだまだ、地面からの距離が遠く、また、自らの動きが感じられないなど、現実感も自分という容れ物も借り物のような感じもするが、それでも、顔や手を獲得するなど、社会との接点、そして社会的な交流の仕方を学び得たことは、西濃学園での3年間の成果だったと思う。

2. 自らに「それでいいのか」と問うまなざしを向けることができるようになったB君

入学時に、図4の人物画を描いた生徒である。B君は、高校1年時の1年間は寮生活をしたが、2年時から通学生となった。体重が100kgを越える体格の生徒である。

彼は、生まれてすぐに養子縁組で子どものいない、実の両親の兄夫婦の子どもとなった。幼少期にその事実を伝えられ、養父母に対する不信感が強くなった。特に養父を想起するような、年上の男性で、部活や生活の中で、彼に注意をしたり叱ったりする立場の人とのトラブルが頻繁に起こった。指導的な立場の相手を絶えず不快にさせる態度をとり、その結果相手を怒らせてしまうが、怒られるとB君はパニックになってしまう。頭が真っ白になり、何を言われたかも覚えておらず、そのため、どうして自分が怒られたのか、また、B君のためと思って怒る相手の気持ちもわからないままになってしまう。そのぶつかり合いから何も学ぶことができず、B君にとってはただ「怒られた嫌な体験」の積み重ねとなってしまう、さらに養父を想起させるような他者への恐怖や不信、同時に、自分への否定感を強めてしまう、という悪循環の中にいた。

家族構成は、祖父母（祖父母は、実の祖父母となる）、養父、養母の5大家族で、近くに実父母や、実のきょうだいが住んでいる。祖父は、怒りっぽく細かい人で、B君は祖父のことを馬鹿にしているが、祖父はB君をだらしなく、また生意気と思っており、対立をしている。祖母は、明るく活発で、また辛抱強く、B君は祖母のことを何でも言う事を聞いてもらえるように思っている。祖母とB君は喧嘩するけど、親しい関係である。養父は、工事現場の監督をしており、真面目だが、怒りっぽく、B君に対しては高圧的で、命令的。B君は、養父のことを怖いと思っており、言う事を聞くが、嘘もつく。お互いに接し方が分からない関係である。養母は、パートで働いており、のんびりしている割に神経質。B君は、養母のことを馬鹿にしている、甘えたり命令できる存在だと思っている。養母は彼に対し、「さまざまな感情がありすぎて分からない」と言う。

成育歴だが、初乳が飲めず、小児科に1カ月入院後、現在の家で養父母に養育されることになった。主な養育者は養母だった。人見知りが強かったこと以外は、特筆することはなかった。

幼児期は、のびのびとした子だった。1歳半から入園する。入園時は、泣きわめいていた。年中の時にエスカレーターで右手をはさみ、骨折する。それまで痩せており、走り回っていたが、動かなくなり、太り出した。小学校に入ると、実姉がいたり、近くに同年の従弟がいることから、子ども達から養子縁組のことを聞かされることを恐れたため、彼が年長の時に養子縁組の事実を伝える。B君は、悲しい表情はせず、「ふーん」と受け止める。B君が太り出した頃に境に父親が厳しくなり、夫婦仲も悪くなった。B君は父親の顔

色を気にするようになる。

小学校では、入学してすぐにB君は、自分の両親が本当の両親でないことを先生やクラスの子に話した。太っていることでからかわれるようになり、登下校を嫌がるようになる。高学年になると、たまに休むことがあった。また、気に入らないことがあると一人でどこかへ行ってしまう傾向があった。小学校6年生の時に担任の先生の影響で野球を好きになり、キャッチボールで遊ぶようになる。給食が楽しみで学校に行くこともあった。また、料理に興味を持ちお手伝いをやりたがった。生き物が大好きで、ザリガニなどを採っては家で飼ったり、学校へ持って行き飼育していた。B君が小学生になってから、夫婦仲の亀裂がさらに大きくなったが、夫婦喧嘩をすると、彼が泣きながら止めに入り、泣きすぎて嘔吐をすることもあった。現在はないが、父親はB君に対して暴力を振るっていた。父親と祖父の対立も激しくなり、口論で治まらず、取っ組み合いの喧嘩になったこともある。

中学校では、体育の授業を嫌がり、体育の授業だけ休みたいと言い出す。家庭での様子について、担任に嘘をつく。先生が嫌い、学校へ行くのが怖いというようになり、朝起きることができなくなり、中学2年から不登校となる。そのため、家庭教師をつけたり、他県のフリースクールへ通わせた。フリースクールでは友達もでき、合宿などもすすんで行くことができた。

また、中学1年生の頃、養母がうつ病になり、養父と別居をする（現在は解消して、一緒に住んでいる）。この頃から、B君は家で暴れるようになり、壁やふすま等を壊す。出張の多い父親が帰って来ると、家出をして深夜徘徊をするようになる。登校する時間に父親がいると、学校へ行くふりをして、どこかに隠れている。中学2年生になると彼も母親の住むアパートで過ごすようになり、家庭教師の日など必要に応じて、家とアパートの行き来をする。ちょっとしたことですぐに気が変わり、やろうとしていた事もすぐにやめてしまう。集団が苦手な気が気に入らないことがあると一人で行動していた。

中学卒業後の進路は、農業に関心を持っていたため、県立高校の農業科と西濃学園の2校を志望したが、県立高校は不合格で、西濃学園へ入学をした。寮生活を通して不規則な生活習慣を改善したいという意欲があった。

高校1年時は、寮生活をしていたが、とにかく、職員とのトラブルが頻繁に生じた。例えば、B君は、野球部で活動をしていたが、送球を取ることができなかつたり、球を落としてしまい、捕球の指導を受ける。しかし、彼は、悪いのは自分ではない、送球をしたやつが悪いんだと譲らずに、怒りだすので、さらに指導を受ける羽目になる。すると、彼はキレて、その場から飛び出してしまい、なかなか職員の気持ちが通じるまでの指導に至らないのだった。

決して反省をせず、常に相手が、周りが悪いと主張する態度について、また、自分も同じようなことでいつも指導されていたり、似たような欠点や弱点があるにもかかわらず、他人の過ちや欠点や弱点には非常に厳しく、あげつらっては非難する態度があまりにも目

につき、「お前だってやっているだろう」「お前には言われたくない」と仲間からも反感を買うし、その場にいる職員も指導をせざるを得ないことが毎日のように繰り返された。指導をする職員も、何度言っても、どう言っても、こちらの思いが入っていかず、逆に関係がこじれてゆくばかりで、扱い切れない、こちら側も腹が立ってくるしもう匙を投げたい、といった気持ちに苛まれた。

B君については、何度もケースカンファレンスを持った。彼の態度に触発されて、指導する側は誰であっても、怒りや嫌悪感、ひいては無力感を引き起こされてしまう。指導する側も持て余してしまう負の気持ちについても、率直に吐き出し、互いをいたわり合い、励まし合った。そうやって、指導する側も回復できると、この人間関係の悪循環こそが修正されるべきで、彼の態度だけを正そうとすると、逆に繰り返したくないことを繰り返してしまうのだ、ということが見えてくるのだった。さらに、話し合っていくと、彼が、これまで育ってきた過程で、実の両親に育ててもらえなかったということも含めて、どれだけ否定されてきたと感じてきたのか、また、他者を信じたり頼ることができず、虚勢を張ることでしか自分を保つことができなかったという痛みに寄り添おうという気持ちが生まれた。また、キレたり、頭が真っ白になって飛び出してしまう、というのは反抗的な態度ではなく、叱られることに対するPTSD的な反応で、それほどの恐怖を再体験していて、何とか自分を守るための自動的な反応だから、さらに追い打ちをかけるように叱っても悪循環を生むだけだ、など、理解し難いと感じる彼の行動について話し合い、共有をしていった。

B君に指導する際は、まずは、頭ごなしに否定しないこと、また、大きな声で怒鳴りつけるといった、彼に恐怖感を強く喚起させるような叱り方をしない、ということを確認し合ったが、それでも、集団の場においては、そのように叱らなければならないこと、あるいは、つい叱ってしまうことも起こってしまった。しかし、必ず、そうやって叱られた体験を別の職員がフォローする、あるいは、少し時間を経て落ち着いたときに再び指導する、というかわりを丁寧に繰り返していった。部活や寮生活の中で、つい感情的になってしまってぶつかり合ってしまったことについて、次の日に担任と話し合うと機会を設けることが多かった。担任とは、落ち着いた、おだやかな雰囲気の中で話をした。担任は、なるべく分かりやすい言葉がけで、彼が否定的な意見や相手を不愉快にさせてしまう言い方をしても、まずは、彼の気持ちを肯定してから、その状況を理解できるように、客観的におだやかに伝えるように心がけた。彼は、自分にも言い分がある、自分ばかり否定されている、という思いを吐き出し、受け止められ、宥められ、少しずつ、状況を認識することができるようになっていった。自分のことを叱る立場の他者に対する印象が、少しずつ変わっていったためではないか、と考える。自分を頭ごなしに否定して拒絶するイメージから、自分の思いを認めてくれ、自分のために思って叱ってくれるイメージへと変わったところがあったのではないか。

B君は、高校1年生のころを振り返って、「1年の頃の自分を思うと、『クソガキ』と思う。迷惑をかけたなーと思う。野球部では、迷惑をかけて、迷惑をかけるたびに怒られた。よく叱ってもらった。自分がうまくプレイできなくて、逆切れしてしまって、怒られるというパターン。今思うと、なんであんなことで怒っていたんだろうと思う。うまくできない自分に対して怒っていたような気もするけど、そうすると、もう全部が許せなくなった」と語った。また、「1年のときは、イビデンの活動で怠けていたときに、叱られたことも記憶に残っている。なんで、こんなことをしなきゃならないんだ、させられなきゃならないんだ、と不満が大きかった。自分は、基本、自由人だから、何か無理矢理させられることが大嫌い。だから、寮のような押し込まれる生活も嫌いだ。しかし、高校1年生のときは、中学のとき、朝起きることができなくて、不登校になったから、朝起きれない、ということは何とかしたかった。中学2年生から、友だちは一人もいなかった。クラスも、教師も、敵としか思えなかった。教師に対しても、なんでお前らみたいなのに、頭を下げなきゃいけないんだ、と思っていた。そういうのが、高校1年生の頃はあったと思う。中学の教師は、とにかく、言い方がむかついた。頭のいいやつと、悪いやつとで、全く言い方が違った。自分は、中学1年生のときは、まだ学校に行っていたけど、頭は悪かったから、ボロカスだった。許せなかった」と、教師や指導する立場の者に対するイメージ、ひいては周囲のイメージへの悪さを語った。

高校2年になると、彼の希望で、寮生活から通学に切り替えたのだが、その際も彼の衝動的な言動によって、学校側と家族が食い違ったまま振り回され、不穏となってしまうことがあった。しかし、学校側と彼とで、また、学校側と家族でしっかりと話し合い、また、彼と家族の間でも、彼の言い分も認めながら話し合いを持ってもらった。このことを、「寮をやめたのは、1年たったし、自分の生活のスタイルに、目処が立ったと思った。しかし、そのことで、学園では、担任、部活の顧問、学園長と、みっちり話し合いをしたし、家では、おやじ、おふくろと話し合いをした。おやじは、絶対に自分の話を聞いてくれなくて、頭ごなしな人。しかし、このときからかもしれないと思うんだけど、自分の話を聞いてくれるようになった。このときも、他の家から見ると、おやじの言い方は冷たいように聞こえるかもしれないけど、『おまえには投資しているんだから、それを返せるように自分でやれるんだな』と言われて、寮生から通学生になることを認めてもらった。今でも、いろいろ言われるが、『分かっているからちょっと今は、だまって』と言うと、とやかく言わず、見ていてくれるようになった。おやじとは、大分、変わった」と振り返る。

彼を認めながら、また、いつも自分だけ否定されて見捨てられてしまう、と感じざるを得ない彼の痛みに思いをはせながらかわっていく、という学園の指導を通して、彼の叱られることに対する過敏さと、叱る人へのイメージが、多少なりとも和らいだのではない

か。その結果、彼が、過剰に反発したり拒絶することも和らぎ、話し合いという状況が保たれやすくなったのではないか。そのため、養父としても、彼の言い分を認めやすくなったいったのではないか。悪循環が少しではあるが、和らいできたのではないか。養父だけでなく、学園の男性の職員との衝突も少なくなっていた頃でもあった。

通学に切り替えた彼だったが、学園側が思っていた以上にはやれていたが、それでも、朝起きることができず遅刻をしてしまう日もあった。彼は、「いざ、通学生になったら、最初はしっかりやっていたが、反動が来たと、いうときもあった。これも、自分のパターンなんだけど、我慢しすぎて、ため込んでしまうと、その反動が来て、バツと出してしまう。しかし、そのときも、担任や野球部で関わってくれた先生にお世話になった。『それでいいのか』という言葉が心に残っている。高校1年生のときの自分だったら、『いいに決まってるだろ、ほっとけよ』と思った。しかし、高校2年生になって、この言葉について考えるようになった。今は、先生に言われなくても、自分に対して問い掛ける」と語る。

高校1年生の頃には、様々な行事に対して「なんでこんなことやらなきゃいけないんだ」と不満しか持たず、拒否していた彼だったが、「まあ、進路のためもあるし」と笑って妥協できるようになった。「生徒である限りは、理不尽でも言うことをきかなきゃ、という割り切りも大事ですよ」と余裕を持って笑って受け容れることができるようになっていた。そして、「正しいことを言われていることはわかっていた。しかし、受け入れるまでには時間がかかった。自由にやりたい人間だから。しかし、『それでいいのか』という言葉に、このままいったら、自分はどこへ行ってもだめだ、周りに、はぶられて相手にされない、というのが分かった。でも、最初は、プライドが曲げられなかった」と語るのだった。

目上の男性との関係性が少し変わったおかげで、学園だけではなく、アルバイトでも、まずまずうまくやれるようになったことは、彼の自信につながっていった。高校2年生の終わり頃から、うどん屋のチェーン店でアルバイトを始めたが、店長や先輩と大きくぶつかることもなく、卒業まで勤め上げ、進路の方向性を固めるにもいい経験となった。入学当時は、農業に関心を持っていたが、自分の家の土地の規模で農業をやっても未来はないのではないかと現実的に考えて、その方向性を取りやめた。そして、料理が好きなこと、また、WISCで「理論派より実践派」「学校よりも社会の現場でうまくやれる力と可能性がある」というフィードバックを受けたことを自信の一つとして、調理師を目指そうと決めていった。

進路選択については、「母親が、飲食関係で、パートをしているから、よく話を聞いたりしていたし、なじみが持ちやすかった。しかし、先日、講演をしてくださったラーメン屋の店長さんも言っていたが、『ラーメン屋と企業家』の違いというのがあると思う。母親がパートをしているのは、チェーン店で『企業家』のところ。しかし、自分は、公演を

してくださった店長さんのような『ラーメン屋』と言えるような店をしたい。目指しているのは、中華。スタッフ（中堅の年齢の男性で、彼を叱ることもあれば、親身に話を聞きつつ諭すことも多かった）が言っていた、『食材が余らない』というのは、料理関係の店をやるのには、いいと思った。しかし、ある程度は誰でもおいしく作りやすいが、その分、味が重なりやすく、自分らしさをどう出せるかが勝負らしい、とも教えてもらった。（調理師の）専門学校へ行って、コンテストとかで悩んだりしたら、またアドバイスをもらって助けてもらおうと思っている」と笑う。また、母親が料理を好きではないので、自分が中華料理を作って、家族に食べてもらうことが増えた、とも語る。「母親は、家事とか、苦手。家ではぐうたらしている。父親の部屋のこたつで寝ている。昔は、両親はとも仲の悪いときがあったが、今はそうでもない」「この間は、麻婆豆腐と、生春巻きを作った。生春巻きのたれは2種類。スイートチリのたれの方がすぐになくなった」と得意げに話し、実際に料理の腕前もないわけではなく、本当に家族が彼の料理をおいしく、喜んで食べている様子が伝わってきた。また、学園でも、アルバイト先からうどんのたれをもらってきて、うどんを作ってくれたこともあり、「みんな喜んで食べてくれた。それがいい。そんなにもうけがなくても、そりゃあ食べていかれなきゃ困るけど、もうけより、おいしいと思ってもらいたい。喜んでほしい」と語った。

養母から母性の供給を満足に受けることはできなかった彼だが、自分のつくったものをおいしいと食べる養母、そして家族、という家族体験は、自分が家族団らんをつくっているんだ、という自分の存在への肯定感をもたらしたのではないだろうか。一方で、家族にただ受け入れられている、どんな自分でも居場所がある、と思うまでには至っていないとも思われる。養父との関係、養母との関係、家族の関係に確かに変化はあったものの、父親イメージ、母親イメージ、家族のイメージが十分に修復されるまでには至らなかった。

その他、学園での様々な体験に対して、彼は、それをどう体験していたのか。祭りについては、「祭りは、いろんな体験活動の中で、ちょっと違った。他の体験活動とは違う感じ。わーって、感じ。達成感とも違うが、やってよかったな、またやりたいなという感じ。解放される感じで、はしゃいでもいいんだ、という感じだった」と語った。

夏山登山については、「高校1年生のときは、登りたくないの一点張りで、高校2年生のときは、1年生のときに苦しさを知ってしまったから、さらに登りたくない、と思った。しかし、高校3年生のときは、登ろう、という意識だった。1年のとき、2年のとき、あんなに登りたくなかったけど、登ったら、『ひとまわり大きくなった』という実感があった。3年のときは、いろんなことに、『ふっきれた』という感じがあった。また、自分は、良くも悪くも負けず嫌い。高校3年生に登りきらなきゃ、申し訳が立たない、下に格好悪いところは見せられない、腐っても高3だという気持ちですよ」と振り返った。

西濃祭の創作劇の上演では、それぞれが自分に「はまり役」と思える役を演じたこともあり、彼も、「劇をやっていて、役柄と自分は似ていると思った。嫌だ、やりたくない」と

言っている、最後には、結局はやる、友だちのためにやる、というところが、似ていた」と満足げに語ったが、彼が自分らしさとして改めて認識したのは、「やりたくないことでも、大切な絆のためなら、最後にはやる自分、やれる自分」という、人間関係の中でやっていくことのできる力を持った肯定的な自分だったように思う。

卒業前にB君が描いた人物画である。



図7 B君の卒業前の人物画

描線の複数化は変化なく、自我境界が統合しきれなかったこと、また表情は無然としており、まだまだ鬱屈した感情が解消しきれていないことを感じさせるが、どっしりと地に足をつけた姿、しっかりと描かれたた両手は、彼なりに現実感を感じられる社会との接点を見出し、そこでやっていけそうだという自信を表しているのではないか。

3. 「友達」とお互いに呼べる仲間をつくり、人への不信感を収めていったC君

入学時に、図5の人物画を描いた生徒である。C君は中学3年から、西濃学園に通い、高校に進学し、通学生として3年間を過ごした。彼は、中学2年生の体育祭の後から完全な不登校となったが、転校をした小学3年からいじめを受けていたと本人は感じていて、しばしば学校を休んでいた。表面化は遅かったが、長い間不登校の問題を抱えていたと思われる。C君は、知識がとても豊富で、真面目な雰囲気、自分の意見をはっきりと話すことができるが、常に敬語で、何を話しても理屈っぽくなってしまふ。それに加えて、常に自分本位だったので、相手を不快にさせ、怒らせてしまふ。しかし、C君の方も、言葉の暴力に人一倍敏感で、相手の非難に対して憤り、許せなくなってしまう、こじれてしまふのだった。

C君は、父、母、彼、ふたりの弟、母方の祖父母の7人家族で、新興住宅街に暮らしている。父は会社員で、きょうだいはいるが、それぞれに1人っ子のようにと言われるくらい、マイペースで自分を譲らない人である。C君には、「たくさんの経験をして、柔軟性のある人間に成長して欲しい」と望む。母は福祉関係の仕事でパートをしており、子育てについて、「子どもへの接し方は3人同じようにしているが、中々そうもいかなことが多い。最近の高校生の男の子はどんなふうなのか。自分の息子が人と同じなのか違うのかわからない」とこぼす。1歳年下の上の弟は、特別支援学校高等部1年で自閉症である。テレビでポケット・モンスターの話になるとC君と盛り上がる。C君がマージャンに誘うこともある。5歳年下の下の弟は、次男と少し似ている。しかし、C君と関わることはあまりない。母方の祖父は、C君と父とよくマージャンをやって遊んでくれる。母方の祖母は、小さいころからC君の面倒をよく見てくれ、彼が最も話しやすい相手である。両親より、祖父母とのつながりが深い。

C君の成育歴だが、乳幼児期の発達は、何につけても平均より早く、手がかからなかった。人見知り、夜泣き、おねしょも全くなかった。ただ、初めて幼稚園へ行った時、迎えるバスに母親が乗って行かないことを知ると大泣きをした。幼稚園の先生は、すぐにおさまり元気になった、母親が一緒にいなくて不安になったり、悲しかったというよりは、一緒に行くと思っていた母親が行かないことを知ったことによるパニック、つまり、自分が思い描いていた状況と違う状況に置かれたことへの混乱のようだったと言われた。

5歳、7歳の頃には自家中毒で入院をする。自家中毒は、小学4年生まで続き、全く食事が取れなかったこともあった。両親は、「昔から精神的に弱かった」と言う。外出時には、必ず、祖父に作ってもらったりリュックサックに、祖父の臭いのついたまくらカバー2枚とミニカーを入れて持ち歩く。忘れた時には大泣きをして、取りに帰らなければならな

かった。両親は共働きで、同居している母方の祖父母に育てられたようなもので、現在も、祖父母と最も親しくしている。

小学校入学時はトラブルもなく、人間関係は順調で、友達もできた。ある日、「ゲームがないと皆が遊んでくれない」と大泣きをしてゲーム機をせがみ、ゲーム機を手に入れたところ、それ以来、ゲームばかりやるようになってしまった。学習態度や成績も普通で、この頃は何の問題もなかった、と両親は振り返る。

しかし小学3年生の時に都市部から地方の新興住宅街へ引っ越しをする。転校先の学校でいじめを受け不登校となっていった。地方の、すでにできあがった人間関係の中に上手く入ることができなかった。体が小さかったので「チビ」と馬鹿にされたり、動作が他の子と比べて遅いことをからかわれた。また、彼の傲慢に見える態度に対して「堀江社長」と嫌なあだ名をつけられた。「お前の触ったものは腐食する」と言われたり、無視によるいじめもひどかった。また、下校の際に迎えに来た友達の親の車に「C君の家は知らないから」と自分だけ乗せてもらえずに1人で帰ったこともあり、このことで母親は学校へ抗議をしたがどうにもならず、彼だけでなく、彼の家族も孤立感と学校に対する不信感を感じていた。

中学校へ入学すると最初は新しい友達ができたと喜んで登校していたが、小学校の時のいじめっ子の影響で、再びいじめを受けるようになる。自発的に部活に入り、熱心に取り組んでいたが、馴染めなくなっていった。試合では、心の中で、自分の中学校が負けると叫んでいたと、のちに彼は語る。中学1年時は、担任の先生に相談をし、先生は全体へ注意をしてはくれたが何も変わらず、「相談しても、結局は何も改善されない」というC君の信念を強めてしまった。そして、中学2年時の体育祭で、チーム競技でうまくできなかった彼は、身体障害者を揶揄する言葉で中傷される。その一言で、C君は完全に登校できなくなってしまった。

このトラブル以来、「人に何を言ってもどうせ無駄」「人付き合いは面倒くさいもの」「人間関係なんてどうでもいい」と考えるようになったとC君は言う。勉強面では、分からないことは先生に質問するようになっていたが、分からないこと、解けないことが段々と多くなっていった。家庭でも、何に対しても理屈っぽく話すようになった。

中学3年生の時は、他校から移動してきたばかりの先生が担任となったため、ほとんど話したこともないままに終わってしまう。結局、地元の中学校へ再登校できず、西濃学園へ入学をする。学園では、授業には真面目に出席し、知識も豊富で、発言も多かった。他校との交流会では実行委員長に立候補をしたり、文化祭ではナレーター役をしっかりとこなし活躍をした。しかし、職員に対する反発も見え隠れしていた。自分の意見を否定されたり、納得できないことを言われると、反論が止まらない。また、日頃から、人を不快にさせてしまう、あるいは、人を不快にさせるためにわざとそのような発言をしているのではないか、と思うような、後ろ向きな発言が多い。「そんなことをしても無駄だ」「知らな

い方が幸せだってこともある」「くだらない」など。

そして、引き続き、西濃学園高等部へと進学をした。クラス委員長へ立候補をしたり、授業には真面目に取り組む。しかし、職員や周りに対する否定的で悲観的な言動は変わらないままだった。そして、「僕に話を聞かないで欲しい、入り込んで欲しくない」「自分達が良かれと思って勝手にやっているけど、それは先生のエゴ」「自分が絶対に正しい、みたいなことを言われるとカチンとくる」「人付き合いが面倒くさい。他人と関わりたくない」「1人の方が楽しい」と言う。その一方で、「自分はすぐに熱くなってしまう。頭に血が上りやすい。ケンカ口調になってしまう」「自分は柔軟性がない。神経質」と省みることもあった。

高校1年の頃の夢は、声優で、夜中にパソコンに向かって練習していることもたびたびあったそうだ。母親は、C君の声が大きいので、弟が起きてしまうと困っていた。休みの日など、家庭で生活をするときには、昼夜逆転傾向が強かった。深夜アニメにはまり、録画をして、それを毎日見ている。自室が一番好きなんだと、居間でテレビを見る以外のほとんどの時間は、自分の部屋のベッドの上で過ごしている。部屋では、人に触られたくないものはしっかり管理しており、弟達に触られて良いもの、触られたくないものを区別している。部屋には、漫画が200~300冊あるそうだ。カード類も大量に持っている。また、小学生のころから大切にしているぬいぐるみが何体かある。

両親は、「転校してきてから、辛い思いをさせた。弟が大変なのでしっかりかまっていあげられなかった」と、彼に十分に労力をかけることができなかったことをすまなく思う気持ちと、「弟が大変なことは分かっているのに理解しようとしめない。自分とは関係ないと言う」と非難がましい気持ちになることがある。また「つかみどころがない子」「親の話にすぐに首を突っ込んでくるところが困っている」また「話し出すと止まらないし、口論になるので、最近は親の方が黙ってしまう」「何でもベラベラと話し、空気が読めない。人の心が読めない」と、特に思春期になってからは、彼を理解できない、と否定的に感じるようになったようだ。しかし、「登校しているから」「やはり、弟に手がかかる」と、相談が継続されることはなかった。

高校1年時は、クラスの中で、誰かと誰かが衝突して、そこにまた他の誰かが口を出したり首を突っ込んで、ややこしくなったり、こじれそうになったり、ということが常に起こっていた。しかし、担任が間に入り、それぞれの言い分を丁寧に聞いて、現在繰り返している人間関係と、それぞれが過去に繰り返してきた人間関係をつなぎ合わせ、現在と過去の修復にもつながるようなかわりを繰り返していった。そのため、激しくぶつかって互いに感情的になって自分をさらけ出したとしても、クラスの人間関係が切れてしまうことはなく、ぶつかり合う前より親密になることもあった。

この頃を振り返ってC君は、「小学4年生のときにクラス全員からいじめをうけた。自

分は一言多いんだけど、それは自覚はしているんだけど、ぶつかった女子がうわさを広めてきた。しかも、それがずっと長引いて、小学校のときはずっと、中学校に入ってからも続いた。クラスみんなが敵。先生も。相談したけど、なにも変わらなかった。言っても無駄だし、大人は信用できない。人は信用できない、疑ってかかる、というのが自分の原点になってしまった。今でも、引きずっている。しかし、学園で、長い間付き合った分だけ、言いたいことが言える、言ってもいい、言い過ぎてもいじめられない、そんな仲間が自分にもできた。クラスの仲間。ここには、「一緒に遊んだ先輩達も入る」「そうやって思うのは、高校1年の夏休み前に、転入生が入ってきて、いろいろ刺激されたこともある。良くも悪くも刺激されて、本音でぶつからざるを得なかったというか。でも、それで、『お互いここまで言っても受け入れてもらえた』というのはあったと思う。B君も一言多くて、自分と似たタイプだと思う。でも、お互いに笑い合える。怒らない。怒ったこともいっぱいあったけど、こういう感じでいいんだ、というところが見えたというか」「ラインでのやり取りでけんかになることもよくあった。しかし、クラスの他の子が『もう寝ろ』とラインで言ってくれて、そこで終われて、助かったと思うこともよくあった。最初は、次の日、気まづくなっていたりしていたけど、引きずらないようにすることを学習した。次の日も、いつも通りのやりとりから始まれば、お互い大丈夫」と語った。本音を出せる人間関係の体験、すると、どうしてもぶつかることもあるけど、それで終わってしまうのではなく、修復ができるんだという体験、ぶつかる前以上に親密になれることもあるという体験、さらに、その相手とうまくやっていける加減を自分は見つけることができるんだという体験、を1年かけてクラスの人間関係を通して、C君は体験したのだった。

しかし、「それは、西濃学園だからできたことで、もっと大きな人数の集団に入ったときに、同じようにやれるかどうかは、自信がない」とも言う。「AO入試に行ったとき、会場で、違う高校から友達同士でできている人達がいる、そこで、もうすでにできているグループを見たときは、ああ、また小学校のときみたいになるんじゃないか、と不安になった」「学園では、少人数だから、言わざるを得ない、ということが多々あった。でも、それは、お互いにそうだった。それと、言い過ぎたり、言い足りなかったりしたときに、弁明が伝わる。担任の先生が間に入って来て、あの時はそういうつもりじゃなかった、という真意が伝えやすくて、助かった」「だから、小学校のときみたいにこじれない。女子がいなかったことがかえってさばさばして良かった。でも、これから自分が行くところ（進学するところ）は福祉系だから、女子が多い。女子とやっていける自信はまだない」「それに、ぶつかることが怖くなくなったわけじゃない。ぶつかるという状況は、できたら避けたい。ぶつかって、より親しくなる、ということもあるんだけど、それよりはデメリットの方が大きいイメージ。いつもの仲間となら、ぶつかっても、それもまたいいんじゃないかと思うけど、ぶつかって変になることはないから。でも、やっぱり怖い、みたいな感じはある」と不安を語った。

また、C君は3年間を振り返って、様々な行事を自分がどう体験してきたかについて、語ってくれた。

「高校1年生のときは、全てにおいて、『なんでこんなことをやらなきゃならない』と思っていた。気付いたら、『まあ、やっておこうかな』と思うようになっていた。1年間過ぎて、高校2年生になる頃には、精神的に落ち着いていた、というのがああると思う。いちいち反発をしないでも済む、というか」「地域活動、ボランティア活度では、揖斐川マラソンの給水活動のような、直接に人の役に立っている、という感触が感じられる活動が好きだった。正直、なかなか、森林活動は、手ごたえを感じることは難しかった」

「夏山登山は、高校1年生のときは、『めんどくさい、なんでこんなことやらなきゃいけないんだろう』と思った。しかし、親から『1回は行ってみて、それでも嫌だったら、後は自分で判断してみれば』と言われたし、1回はやってみよう、と思った。高校1年のとき、高校2年のときと散策だった。しかし、高校3年生になって、『今年は最後だし、何かしよう』という気持ちによくなった。だから、みんなと蝶ヶ岳にチャレンジして、登れた。西濃祭でも、これまでは中学生が中心だったから、高校生中心の出し物をやってみたい、と思った。『なんとかしなきゃ』という気持ちから、『何とかできるはず』と自信がついて、『何とかなる』と思えるようになって、頑張れた」

高校3年生の西濃祭では、C君はとても主体的に動いていた。やり遂げた後、「劇が終わってから、燃え尽きたみたいにやる気がなくなってしまいました」と言うほど、専心していた。「劇は、高校3年生の提案で持ち上がった。何をやろうか、自分達から提案して、3年生を中心に話し合いをした。内容は、スタッフが細かく考えてくれたが、枠組みは僕ら、3年生で話し合って決めた。そして、最後までやり切った、と思う」と、いきいきと、自信にあふれた表情で語ってくれた。

「劇では、B君の最後のセリフに共感した。僕も含めて、今の若者達の現実をよく伝えていたと思った。『今まで何も学んでこなかった』というセリフと『自分のこととして考えていない』というセリフ。今は、物があふれていて、ものの大切さを本当の意味で知らない。隣の国で、たとえ戦争が起こっても、それは対岸の火事で、自分とは関係ない。僕達の親世代より上の人達にとっては、戦争も現実感があったかもしれないけど、僕達の世代は何も分からないのが現実。結局、『自分には関係のない話だよ』となっちゃう。何か意見を述べなければならぬときは、『平和が大事』とか『戦争はいけぬ』とかおあつらえの言葉を言っている、それは冷めきった言葉。それくらい、何も学んでこなかったし、何も学べていない」と、劇を通して、自分達に必要なことを改めて学んでいこうと思ったことを熱く語った。また、劇の状況を、自分自身に引き寄せても語った。「本当に、劇と同じ状況に置かれたら、パニックになるか、もう死んでもいいから戦地に行こう、とやけになるか、極端になりそう。自分にはそういうところがある。でも、ちょっと、変わってきたかもしれない。例えば、テストで、やらなきゃならないのにやっていないとパニッ

クになるか、もういいやと投げ出すか、黒か白かだったのが、そうじゃなくてやれるだけやろう、みたいに思うようになった」

また、劇を通して、改めて仲間を大事にしたい、と思っている自分についても語られた。「劇の中でもそうだったけど、仲間のことは他人事とは思えなくなってきた。例えば、A君の就職前、自分がうまくやれたことについては、しっかりと、『こうやったらきつとうまくいく』と伝えなきゃ、と思った。自分が成功したことをA君に渡したい、と思った。これは、関係性の問題なだけかもしれないが」

さらに、自分達の学年だけが良ければそれでいいというのではなく、後輩達に自分達がこれまでに経てきたことを伝えていきたい、という気持ちが語られた。「高校3年生になって、意識は変わったと感じている。創作劇のときでも、高校3年は意欲的だったが、それを高2や高1に伝えていくのに、『引っ張ればついてきてはくれる』と単純に思っていたが、だんだん『それでいいのかな』と思ってしまった。できれば、高2や高1も、『誰かに言われたからやる』というのではなく『自分達からやろう』と思ってほしい、と思った。言われて動くより、自主的にやった方が楽しいというか、『やった!』という感じがあると、自分は思う。『言われて動く』だけだと、言われたことをこなしているだけで終わってしまうけど、『自分で決めて、自分でやる』だと、やった次に、じゃあ次は何をすればいいのか、なにをしたいのか、次のことを考えたり、次のことが見えてくる。そして、選択肢や視野が広がる。進学が決まったときも、じゃあ、次に何をしなきゃならないか、が明確になったし、一つ一つそれをやり遂げていける、と思ったから」と。

「高校2年生のときが分岐点だったかもしれない。もう、あまり反抗心やイライラはなかったけど、『反抗心があるぞー』『反抗してるんだぞー』みたいなことをアピールしていて、バカやっていたなーと思う。クラスの皆と一緒にバカやったなー。担任にもすごい剣幕でしかられたこともあったし、1対1の面接も結構あった」「それでも、高校2年生になった頃には、少し落ち着いて、自分に少し自信が持てたから、アルバイトがやれた。アルバイトは自分の幅を広げてくれた。社会経験は、精神的成長につながると思う。その他、就労体験も良かった。3日間だけだったが、いろいろな働くイメージが作れて、自分も社会に出ていけるんだ、と思えた」「しかし、何かをしたから何かが変わった、というわけじゃなくて、3年間、日々生活していて、こうなった、としか言いようがない。気づいたら、ちょっと自信が持てるようになった、とか、ちょっと変わったかなーと思うようになった感じ」

そして、卒業を控えたC君は、「もうすぐ卒業で、ひとつの区切りだが、それはそれでこういうものかな、と思う。悲しくないわけじゃないけど、高校という3年が過ぎればそこまで、だから。でも、だからと言って、関係が切れるとは思っていないけど。この仲間の中では、人に合わせる事が苦痛ではなかったなーと思う。お互い様だし、断ることも

できるし。お互いにお互いの事情を優先しながら、合わせるところは合わせられるようにする。社会人になっても、会ってるんじゃないかな。高校なら高校だけの付き合い、という友達もいるだろうけど、その区切りを越えても会ったりする仲間というのは、親密度が高いということだと思ふし、そんな友達の重要度は高い。『友達がいる』と自信を持って言えるようになったことは、自分にとってうれしいことだと思ふ。友達というのは難しい。自分だけが相手のことを友達だと思っていたら、惨めなこと。それに、相手が自分のことを友達だと言っても、自分がそれを嫌だったり認められなかったら、成り立たないもの。しかし、この仲間は、お互い、『ああ、俺ら友達だよ』と言える」と、3年間で築いた人間関係を誇らしく語った。

卒業前にC君が描いた人物画である。

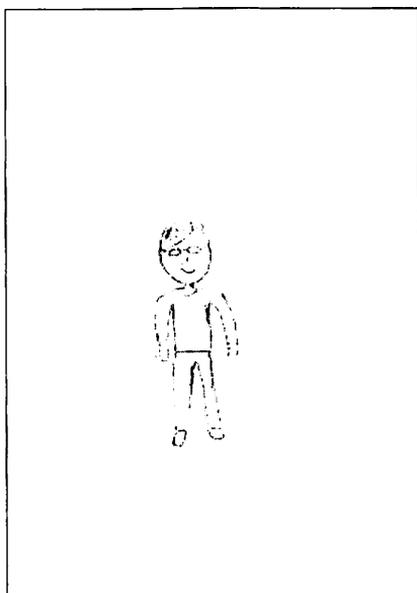


図8 C君の卒業前の人物画

まだまだ、地面からも距離があり、手には指がなく、顔も十分に描かれてはいないが、棒人間を描いたころと比べると、人間の形を獲得することができた。仲間同士でぶつかり合ったり、3年間の体験を通して、自分の輪郭をつかんでいったのではないだろうか。また、線の細そうなところも含めて、とても実際のC君に似ている。

A君にもB君にも共通しているが、現実の自分達とよく似た自分を描くようになった。等身大の現実的な、実感のともなった自分というものを獲得していったのであれば、うれしく思う。

VI. 西濃学園のあゆみ

- 1991年 学校にいきたくても行けない子ども達を当時は登校拒否と呼び、基本的には甘えが原因と考えられる風潮の中でそれだけではないと考える現場の教師で私的な「東海青年心理研究会」を結成し不登校の本質を勉強すると共に自立支援を目的としたボランティア団体を大垣市で結成。以後10数年にわたり、ボランティアとして毎週地区センターをお借りし、教師、学生が不登校で悩んでいる多くの子ども達と遊んだり学習するといった活動を行う。
- 1992年 大垣市にて有志のお母さん方が「親の会」を結成されるのを手伝い、子どもの会、親の相談会などを開催し組織としての活動を始める。
- 1993年 不登校生の自立支援には、合宿が効果的と、池田豊應先生（現愛知学院大学教授）の指導で夏の合宿（サマースクール）を開始、以後学校設立まで毎年実施する。
- 2003年 4月 ボランティア活動による限界を感じ、新たな支援機関の設立を検討。山本次能先生(学園初代理事長)を代表としてお迎えし、宿泊型フリースクール「坂内新生塾」を設立する。
- 2004年 11月 NPO法人として許可され「坂内新生学園」と改称する。
- 2005年 6月 西濃運輸（株）様より揖斐高原の日坂山荘の貸与を受け、NPO法人「西濃学園」と改称し学園規模の拡大と学校教育の取り入れを検討し始める。
- 2008年 1月 旧藤橋小中学校の廃校を揖斐川町より貸与され、技能教育施設として岐阜県より認証される。
- 2008年 4月 星槎国際高等学校と連携し技能連携校として発足する。
- 2008年 12月 学校法人 西濃学園中学校が県より認定される。
- 2009年 4月 技能連携校は揖斐川町より旧長瀬小学校を貸与いただき移転。藤橋学舎は西濃学園中学として開校する。

2003年（平成15年）4月、揖斐高原のゴルフ場が閉鎖されたあとのクラブハウスにて「坂内新生塾」と命名しフリースクールを創立しました。生徒2名からの出発でした。当時、正直言って不登校で悩んでいる生徒の数は多く、しかも高校中退後の進路が不確定といった現状を踏まえた設立でしたので、開塾後はほどなく生徒数が確保され経営に苦しみといった思いはなく夢と希望に満ち、悩める子ども達の笑顔を取り戻すという意欲を持った5名の専任スタッフの情熱の船出でした。しかし、思うように入塾する子ども達は増えず経営の苦しみの連続でした。とにかく、今関わっている子ども達の自立を一番大切にしようというスタッフの思いを共有しての活動でした。そのように子ども達に目を向けての教育活動に専念できましたことは、代表の山本次能先生、理事の若園信男氏、野田紀男氏、堀守氏の方々の温かいご指導とご支援がいただけたからと肝に銘じております。

学園の教育の基本は子ども教師の力量と臨床心理士の太田宣子先生のほぼ毎週のケース会議でのアドバイスを軸としています。悩める子ども達と共にの生活は想像以上に精神的、肉体的に疲労を伴いますが、子ども達の巣立と接しますと喜びを深く感じ情熱が駆り立てられます。生徒数は経営の安定までにはまだまだといったところですが、本年度はようやく増加の兆しが見え始め長いトンネルの出口が微かに見え始めました。

また岐阜県不登校生徒対策支援モデル事業の指定をいただき、学園の最も大きな行事として北アルプス登山には十分な準備を、そして生徒と共に廊下の腰板張り、憩いの間のステンドグラス張りを行わせていただきました。生徒達にとってはいずれも学校が自分達の居場所と実感できる行動、作業として行うことができました。また、子どもも複雑化する子ども達の心の本質を学習する研修会を、定期的に臨床心理士の小泉規実男先生から、さらに鳴門教育大学教授の吉井健治先生をお招きし子ども達の力量を高めることができました。

学園がこのように一步一步進めましたことは、多くの方々の温かいご指導とご支援の賜物です。特に公益財団法人田口福寿会様、株式会社大垣ケーブルテレビ様、そして理事のみなさまには温かいお心をいただいております。

これまでの子どもの取り組みを、太田宣子先生を中心にまとめていただきこの報告書を作成いたしました。本年度の報告に関しましては高等部の生徒も視野に入れ考察いたしました。高等部は校舎は別ですが、寮生活は共に生活しており、また学校行事も共に活動しており学園の基本的な教育の流れを見ていただく趣旨からであります。

お目通しいただきご指導がいただければこの上もない喜びです。

D. N. スターン著 小此木啓吾・丸田俊彦監訳 神庭靖子・神庭重信訳（1989）乳児の対人世界 理論編・臨床編 岩崎学術出版社

D. W. ウィニコット著 牛島 定信翻訳（1977）情緒発達の精神分析理論—自我の芽ばえと母なるもの 岩崎学術出版社

花田篤史（2013）長期化した不登校中高生の心理課題—自閉症スペクトラム障害とアタッチメント障害との鑑別を視点として— 愛知淑徳大学 修士論文（未公刊）

木村奈央・後藤秀爾（2012）保育所における関係性障害の子ども達の集団参加支援—自閉症周辺障害を持つ子の自己イメージを中心に— 愛知淑徳大学心理臨床相談室紀要,

大久保亜貴（2013）自閉症の疑われる不登校児の社会参加不安—自己イメージの理解と支援についての一考察— 愛知淑徳大学 修士論文（未公刊）

松木邦裕（1996）対象関係論を学ぶ—クライン派精神分析入門 岩崎学術出版社



平成26年度

西濃学園教育報告書

豊かな学びの共同体を目指して
～「存在することの確かさ」を支える～

平成27年3月発行

| | | |
|---|---|---------------------------|
| 発 | 行 | 学校法人西濃学園 |
| 印 | 刷 | (株) 旭クリエイト |
| | | 〒503-2124 岐阜県不破郡垂井町宮代1478 |
| | | TEL 0584-23-3211 |